

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

11



第七十八卷 第十一号 日本幼稚園協会

フレーベル館の保育図書

好評発売中!!



子どもの危機

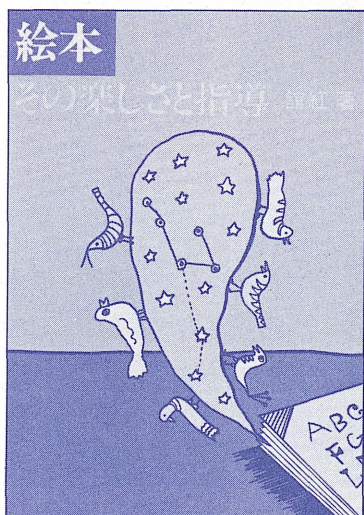
〈自然にかえれ!といわれるが〉

海 卓子・著

B6判・232頁・定価850円 円160円

環境論、子どもの人格形成、子どもの創造性の育成などについて現代の問題点とこれからの幼児教育のあり方をのべた書。

好評発売中!!



絵本 その楽しさと指導

館 紅・著

B6判・180頁・定価850円 円160円

なぜ子どもたちに絵本を与えるのか。絵本によって何が育つのか。絵本のもつ役割について、著者の豊富な保育現場の体験を通して語られています。

幼児の教育

第七十八卷 第十一号



幼児の教育 目次

——第七十八卷 十一月号——

© 1979

日本幼稚園協会

表紙 油野 誠一
カッ ト 中島 英子

心に残る保育を……………堀内 康人…(4)

幼児教育と発達心理学……………永野 重史…(6)

「オルガンあげます」顧末記……………田中三保子…(12)

書 評……………(16)

「幼児の教育」復刻記念懸賞論文募集……………(18)



世界の子どもたち

オーストラリアの幼児教育

永井康子…(20)

ダンスの変遷史(一)

興水はる海…(24)

◇園長室の窓から

渡辺 茂…(30)

ルソーの夢

——むすんでひらいて考——(その十四)

海老沢 敏…(34)

現職研究レポート

その二 R幼稚園の場合

角能清美…(41)

遊びの捉え方に関する一考察

——子どもの世界への接近の可能性——

入江礼子…(48)

保育の体験と思索

——旅によって触発されたもの——

津守 真…(54)

心に残る保育を

堀内康人

私事になりますが、私の母が死んでかれこれ十八年になりました。六十の坂を越した私は、最近よく母の事を思い出します。私が幼少の頃、父は師範学校の教頭から新設の旧制中学校長に転出した頃でありました。その頃既に女四人男三人の兄弟姉妹でしたから、母親の家事労働は大変だったに違いありません。母も亦師範学校を出てしばらく小学校の訓導をしていたようです。子ども七人の世話を電気洗濯機も冷蔵庫もない時代にしていたのですから、毎日毎日が母にとっては火の車の様な生活であつたにちがいないのですが、私は野山や河原であそびほうけていたので、別に母が軋手古舞をして働く姿を目に浮べることは出来ません。ですが特に心に残ることを御紹介しながら、そのことと幼児教育と結びつけ

て見たいと思います。

イギリスの古い子どもの歌に「桑畑をまわる」という歌があります。それは霜のおりた朝、子ども達が輪になって桑畑をまわり、歌い終ると一斉に桑畑に飛び込んで桑の実を食べるのですが、私共の子どもの頃も、そんな歌こそ唱いみませんでした。七郎さんという餓飢大将が、桑の実を食べるぞと号令をかけるや畑に入つて、口を真赤にしてむさぼる様に食べたものです。夕飯前にこうして桑の実を沢山食べてしまうと、今でいうデザートが先になる為、折角の夕飯のご馳走も食べられなくなり、そのことで良く母に叱られました。そんなことがあつてから私があそびに行こうとしますと、桑の実のみのる頃には必ず桑の実を食べない約束をさせられました。でも夕飯前の桑の実それはそれはおいしくてつい約束を破り、それが見つかつて、私は家の外に立たされ姉や弟の食事が終るまで待たされました。その時の母の厳然とした姿勢が今でも強く残っております。

昔はお菓子屋さんが大きな風呂敷に菓子の見本箱を包んで来て注文を取り歩いていたものですが、その菓子が配達されるのが待ち遠しかったものです。広いテーブルの前に坐らさ

れて、皿に分けられた大きな最中を私は二つペロリと平らげ、よちよち歩きの弟が手にあまるその大きな最中をゆっくり食べている所に近づき、兄ちゃんのお口にちよっと入れてごらんといったのです。弟が最中を差出したとたんぱくりとやったのはよかったのですが、弟の指をかんてしまったのです。さあ大変弟は火のついた様に泣き始めました。私は御免御免といいながら、齒の跡のついた弟の指を撫でていますと、黙って私に近づいた母が「弟の指まで食べたいおいしいん坊」といったかと思うと最中を私の口に二つも三つも押し込みました。私は息が出来ないで苦しんでいると姉が指を突込んで出してくれました。兄弟姉妹七人の洗濯物それを洗濯板を使ってやる母の姿を時々眺めて母さんは大変だなと思いました。母は私を井戸のポンプの所に立たせておいて、よごれた水を捨てると、「はい水をだして」と命ずるので私は何回もポンプをこがされました。時々じっとして立って待っているのがいやになり、逃げ出そうとすると、駄目です洗濯が終るまでお母さんのお手伝い、待っている間に糸瓜（へちま）のなっているのを見ながら「誰が風を見たでしょう、僕も貴女も見やしなさい」を唱って下さい、するとお母さんのお洗濯も楽しくなり

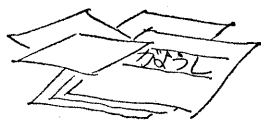
ます、と歌をよく唱わされたものです。私は五十数年たった今でもこの歌を唱うと、あの糸瓜棚、井戸端、ポンプその下で洗濯する母が一枚の絵の様に浮び上って来ます。九人家族の食事を切り盛りする母はベテラン調理士でありました。広い板の上で棒をまわしながらウドンを平らにして最後はトントンと幅の広い庖丁で切って仕度をする作業過程はよく観察していますので、こね方、粉のふりかけ方、伸ばし方、力の入れ具合まで思い出すことが出来ます。

私は時々、幼稚園や保育園にいつて、先生が子どもを保育する姿勢を見ながら、この子たちはきつと先生のこの姿勢を一生涯に残すことだろうと思ったときほっと救われた様な気持ちになります。砂遊びを終えた子ども達に、水洗い場に行って「ああ楽しかったね、さあバケツをきれいに洗って、まだきれいになりません、そうですきれいになりました、さあ棚にしまってください」、などと最後の子が道具を洗い、しまいい終るまで根気強く身守っている先生を見るとそんな気持ちになります。色々言いたいことが沢山ありましたが、私の母の事が多くなってしまつて御免なさい。ではいつまでも子どもの心に残る保育をなさってください。

（東京家政大学）

幼児教育と発達心理学

永野重史



—

大学時代に、私は心理学科に在籍した。私にとって、幼稚園児は、まずはじめに発達心理学の研究対象であった。ということは、具体的にはどういうことであるかというと、幼児を保育室の中で見ることをせずに、ひとりずつ別室に呼んで、あらかじめ用意した課題を与え、子どもの反応を観察し、記録するということをしていたということなのである。

今の私は、そういう種類の研究は、幼児についての、ある種の研究であることは確かだが、幼児教育の研究ではないと考えてい

る。幼児教育にとってまったく無関係な研究かとたずねられれば、その通りまったく無関係ですと答えることはしないけれども、発達心理学の研究だけをおこなって、幼児教育について何か意見を述べるのは、たとえば、物理学だけ勉強して、建物や飛行機的设计に口を出すのと同じぐらい妙なことはないか、と思っている。

いや、そう思っていないながら、今でも、現実に生活している子どもものことを忘れて失敗することがある。ついいうっかり、子どもを発達心理学の標本扱いしてしまうことがあるのだ。

三年ほど前に、NHK大学講座の心理学を担当していた時のことであるが、講義のために、幼児がかいた人物画が必要になっ

た。録画の予定も迫っていたので、ある保育園にお願いして、保育時間中にいろいろな年齢の子どもに人物画をかくてもらうことにしたのである。子どもにしてみれば、妙なおじさんが現われたとたんに、いままでやっていたことを突然打ち切られて、「さあ、これから紙をくばるから、人の絵をかくてくれないかな」などと言われるわけである。たいていの子どもは、そのように言われれば、どうにかこうにか、人の絵をかくてくれる。だが、なかにひとりだけいたのである。人の絵をかこうとしない子どもが。その男の子は、画用紙を横長の位置に置いて、なまずのようなものをかいている。何をかいているのかとたずねると、どうしようかと言う。今はどうしようがかきたいのだ、と言うのである。それはそうだ。急に人の絵をかくと言われたって、絵をかきたくないということもあるだろうし、たとえ絵をかくとしても、人の絵はいやだということもある。それが子どもというものだ。人物画の発達に関する標本を集めようというのは、こちらの勝手な要求である。子どもには、子どもの生活の流れがある。私はたいへん恥ずかしい思いをした。「発達心理学は、従来、とかく、子どもの生活の流れを無視する傾向がありました。」というような説明を番組の中でしておきたいと思ったぐらいである。

私の担当していた番組は「発達のメカニズム」などという題だ

ったので、番組の中で突然そのようなことを言いたせば、こんどは、聴視者の方々の頭を混乱させるだけだと思って、結局は、子どもの絵（生活としてではなく、作品としての絵）が、年齢とともにどう変ってゆくかというようなことを説明しただけで、人物画をかこうとしなかった男の子の話はしなかったのであるが、幼児教育の研究ということから言えば、これでは駄目なのである。だいたい、これまでの発達心理学の研究は、幼児教育にたずさわる人間がいちばん大切にしなければならない部分を無視した形で進められることが多かった。

データを集めるのに、子どもの生活の流れを無視するというのもそのひとつだが、人物画といえは、すぐに手足はそろっているか、手の指は五本あるかというようなことしか気にしないというのも、幼児教育からみればおかしいことなのである。私の知っているある幼稚園では、絵を、子どもの認識発展の手段として利用している。自然を観察すると、気づいたことを絵にかかせるのである。そのような指導に力を入れてみると、子ども達の絵は、どうしても「説明画」とでも呼んだらよいものになる。例えば、木の葉をかけば、まわりがぎざぎざですよとか、葉のまん中に一本ふといすじがありますよ、などという説明をするために絵をかく傾向が強くなるように思われるのである。人物画について、手の

指がちゃんと五本かいてあるかどうかを問題にするような、いわば発達心理学者風の見方をすれば、子ども達の絵は、先生がたの熱心な指導によって、進歩するといつてよいようである。だが、幼児の教育ということからいうと、私には気になることがある。

よく見て、くわしくかくようにはなるが、絵が平面的なのである。子どもの注意は線にむけられて、絵に色彩が少くなるように感じられるのである。つまり、子どもの感情の表現として絵を見た場合に、どこかさびしいところがあるように思われるのである。幼児教育としては、このような問題を研究して見る必要がある。だが、心理学者の手にかかると、子どもの絵を、子どもの知的活動の所産として見ることに重点を置いて、実物をどのくらい忠実にえがいているかということばかりを気にする立場と、子どもの絵を、子どもの感情や性格の表出と見ることに重点を置いて、パーソナリティ診断をはじめる立場とに分かれてしまうことが多いのである。心理学の研究としては、子どもの絵のある側面だけをとらえて研究することも悪いことではないと思うが、幼児の教育としては、子どもの生活を総合的に見る努力をおこたってはならないであろう。

二

自身は、幼児教育の問題を考えるとときには幼児教育の問題として考えなければならないのであって、発達心理学者でござい、などと乙にすましてはならないと、自らいましめているつもりなのであるが、幼稚園関係の研究会に出席すると、現場の方々から、発達心理学者としての説明や意見を求められることがしばしばある。

先だって、日私幼の研究大会に、「劇的活動」に関する分科会の助言者として出席したが、私が問題にしたいと思っていたことは、幼稚園教育要領では、言語の領域に「見たこと、聞いたこと、感じたことなどを紙しばいや劇的な活動などで表現する」とあり、音楽リズムの領域には、「動物や乗り物などの動きをまねて、からだで表現する」とか、「感じたこと、考えたことを、自由にならだで表現する」などとあるために、「劇的活動」と言われるものが、人に見せるお芝居の練習と受け取られてしまつて、他人になつてみるとか、物に化けてみるなどという、想像の世界に入つて自己表現をするという点では共通していながら、身体によつても、言語によつても表現し得るはずのものだという、子ど

もの想像的活動や表現活動としての共通性が忘れられることについて心配についてであった。学芸会の練習のようなことをするのは、幼児のための漢字教室のようなものとあまり変わるところはない。子どもに芸をしこんで、これこの通り立派にしこみましてよと親に見せるのが幼児教育だというのでは困るのである。きめられたせりふをどうしたらじょうずに言わせることができるかということよりも、子どもたちのために何を育てるかということの問題にしたいと考えていたのである。家を出る時に私の頭にあったのは、イギリスのムーヴメントやアメリカのシンガー夫妻の想像遊びに関する研究と実践、そして、イギリスの学校評議会の補助を受けてジョウン・タフがおこなった「子どものコミュニケーション」に関する研究などであった。このタフの研究では、いろいろな働き（機能）をもった子どものことばをどのようにしたら教師が耳にとらえることができるようになるかということのひとつの重要なテーマとしており、子どもも想像の世界でどのような働きをもったことばを発し得るかについての分類をおこなっているのであるが、私には、あらかじめ決めた通りのせりふを子どもに言わせる訓練をおこなうことよりは、子どもが、いろいろな場面（その中には想像遊びをしている場面も含まれる）で、どのような種類のことばを発しているかをよく聞きとるることによつ

て、教師が、子どもの成長の姿を敏感にとらえることのほうがずっと大切なことだと考えているのである。要するに、私は、幼児教育について話し合うつもりで出かけたのであった。ところが、実際には、私が前から恐れていた通り、幼稚園の先生がたは、学芸会の練習のようなことについて報告をするし（「指導書」の「劇的活動」についての説明はそのような説明をまねきやすいものになっている）、私には、それについての発達心理学からのコメントが求められたのであった。

私は愚痴をこぼしているのではない。現場の人々の、発達心理学に対する態度を問題にしているのである。私に向って、どうぞ発達心理学の立場からのお話を、と言ってくださるのは、ことによると親切心から出たことであるのかも知れないが、スイスの心理学者であるピアジェが、小石の列を並べ変えると数も変わったように幼児が考えるのは、幼児が真の意味で数というものを理解していないのだと言うと、それでは、小石を並べ変えても数は同じだと言えるようにしてみましようというので、改めて訓練をはじめたりするのを見ていると、私には、やはり発達心理学の応用の仕方が間違っているのではないかと思われてならないのである。発達心理学の応用の仕方が間違っているだけではない。そもそも教育というものについて、型にとらわれた狭い考え方をしてい

るように思われるのである。

三

教育というのは一種の生産なのであるから生産品がどのようなものであるかを明確にしておいて（教育目標の明確化）、生産工程の様々な段階で、仕様書と照らし合わせて、目的通りのものが出来ているかどうかを調べて（教育評価）みなければならぬと主張する人々がいる。確かにそのような教育もある。あるというだけでなく、世の中の教育は、あまりにもそのようなものであり過ぎていた。だが、教育には、そのように、子どもを規格に合わせて変えてゆく教育のほかに、子どもの個性を発見し、ひとりひとりの子どもに合った教育目標をたてて育てるという、いわば、子どもの個性をはぐくむ教育とでもいべきものがあるはずなのである。ピアジェが数の保存というところではピアジェの試験問題も出来るように指導しようというのは、子どもを規格に合わせて変えてゆく教育のやり方である。子どもの個性をはぐくむ教育では、ピアジェの心理学を、子どもが言ったり、したりすることの意味を考えるうえの参考にはするけれども、こういう問題もあるのだからこれも出来るようにしておかなければならないなど

という短兵急なやり方はとらない。子どもの自発的な活動（それを「遊び」と呼んでもよい）が豊かになるような配慮をしたうえで、眼を開き、耳をすまして、子どものしていることの意味を理解することに努める。そして、必要なときに必要な役割をとることであろう。もちろん、必要な役割をとるということの中には「ものを教える」ということも入らないわけではない。例えば、玉入れのあとで、紅白の玉の数が比較できないで困っていたら、紅白を二列に並べるといふくらべ方を教えるのもよい。二列に並べたときに、一方は粗く並べ、一方はぎゅうぎゅうとつめて並べてあるのに、列の端だけに注目して、「わーい、おあいこだ。引きわけだ。」と子どもが言っていたら、その時点で、ピアジェの心理学を思い出すのはよい。ピアジェが示したのは、数がわかるということの「症候」なのである。子どもの心の成長について、様々な症候を心得ておくのはよいが、幼稚園は対症療法をやるための施設ではない。

それならば、お前は、幼稚園は何をするところだと言いたいのだ、と問われれば、子どもが自立できるようにすることを助けるところだ、と答えようか。

世の中で自立するためには、いわゆる社会性を身につけることも大切だが、知的な能力も大切である。数がかぞえられないよう

では世の中で一人前に生きてゆくことはむずかしい。だから、私は、幼稚園で、いわゆる知的教育をおこなうことを否定はしない。ただ、知識が、生きるということと結びつくためには、何よりもまず、子どもの生活を優先しなければなるまい。玉入れという遊び（遊びこそは子どもの生活だ）がまずあって、つぎに数をくらべるという必要が生じる。そのところで、心理学者のいう「数の保存」という問題も子ども自身の問題として出てくるのである。それまでは、保育者は、可能な教育目標として心に抱いておく程度にして、子どもの活動をよく見るようにしなければならぬ。芽は出てきたときに伸ばすものであって、人工的に作るものではない。知育、知育とさわがなくても、そのつもりで見ているれば、子どもの知性の芽はえはみつかれるものである。

本田和子さんと、横浜のある幼稚園を見せていただいた時のことだが、ひとりの女の子が、小さな食卓に、茶わんやはしを並べている。食卓の四方に、これから客をむかえる準備をしているかのように、黙黙として茶わんやはしを並べているのだが、よく見ると、彼女は、茶わんはそれぞの辺の中央に、そしてはしは、辺に平行に並べるように努力しているらしい。一応並べおえると、食卓を見て、またすこし、茶わんやはしの位置をずらすのである。食卓の準備をしているのだから、これを「ごっこ遊び」

と見るのもよい。だが見方を変えれば、「数学的体験」をしていると見ることもできるのである。私は、この女の子が無心に遊んでいるのを見て、はしの置き方（はしの先を左側に置くということ）を教えてみたら、彼女の坐っている辺以外の、左右の辺や、向う側のはしの置き方をどのようにして確かめるだろうか、などと考えた。発達心理学者は、空間概念の発達と称して、いろいろな「実験」をおこなうのであるが、このようにして、（テスト場面ではなく）子どもが遊びの中で、真剣にとりくんでいる場面の観察から、子どもの発達を見直すことはできないだろうかなども考えた。

学生時代に読んだ本の中に、野生のライオンは、風下にまわって獲物におそいかかるために、何十分もおあずけをすることができのに、実験室にいるライオンの目のまえで、いくつもある入れ物のひとつに餌を入れておあずけをさせると、ほんのわずかな時間で、どの入れ物に餌が入ったかを忘れてしまうと書いてあったが、子どもの生活を離れたところで調べた発達心理学は、もう一度、子どもの生活を見直してみることが必要なのである。

子どもの生活を忘れた幼児教育が、子どもの生活を忘れた発達心理学で武装するなどということがあってはならないのである。

（国立教育研究所）

「オルガンあげます」顛末記



田中三保子

わが家に古ぼけたオルガンがあった。こどものときに、父にねだって買ってもらった板張りの足踏式のものである。愛着もあり、オルガンの音色も好きなので、できることならずっと手元に置いておきたかった。しかし、次第にものは増え、狭い家の中にそのスペースを確保することがかなわなくなってきた。かといって棄てるには忍びない。あれこれ考えた末、区の広報紙の「あげます」欄を思いついた。葉書で申し込みをしたら、大分経って、「十五日の区報に掲載いたしますが、二、三日は電話が集中することと思います。」という趣旨の電話があった。「よろしくお願い

します。」とか答え、いつか忘れてしまっていた。係の人の言葉に、それこそ文字通りの意味が込められていたことなど気づくはずもなかった。

電話のベル。恐らくずい分鳴らし続けた後、やっと受話器をとった。時計を見ると、六時四十分を指している。こんな時間に一体誰かしらと少々腹立たしい思いである。というのも、普段であれば起きていなければいけない時間なのだが、この日は年に一度あるかないかの遅い出勤日だった。疲れもたまってくる頃で、もうしばらく眠っていたかった。電話の主は女性で、「今、新聞で

みたんですけどオルガンをいただきたいのですが。」という。オルガン？ ああきょうは十五日だっけ。深い眠りから引き起こされた頭を無理に醒めさせながら、とりあえず「どなたがお使いになるんですか。」などと尋ねてみる。「娘がピアノを習いはじめたんですけれど、とてもピアノまでは手がまわりませんので、是非譲っていただきたいと思ひまして……。」「有効に使っていただける方におりますので、事情を伺ってから決めたいと思いますが……。」相手の人は何やらとても急いでいる風で、朝早くから申し訳ありませんけれどと云いつつも、折角一番目にかけたのだからどうしても私にとかなか電話を切ろうとしない。さしあげられるようでしたら連絡をしますからと名前と電話番号を聞いて、やっと放免してもらった。

ふとんに戻ると、程なくまた電話のベル。やはりオルガンの件らしく、先の電話で目が覚めてしまったという夫があれこれ尋ねている様子である。私の身体の不調を気づかって、夫が早朝分を引き受けてくれた。「それでは欲しいでしょうね。」などと答えている声がとぎれとぎれに聞こえてくる。好意に甘え、頑張ってもうひと眠りと思うが、うとうとすると電話のベルの連続で思うように眠れず、観念して起きることにした。夫はまだパジャマ姿のままである。やむなく、まるで幼児にするように着がえさせる。

夫は受話器をもちかえたり、シャツをかぶるために「ちょっと失礼」などと電話に云ったりしている。なにしろ、受話器を置けばベルが鳴るという状態である。朝食も合い間に少しづつ詰めこんで、いつもより遅れて夫は出かけていった。さて、私も仕度をしなければならぬ。思いのほか時間をとられてしまったので、ゆっくりするわけにはいかない。だから、もう出るまいと思うのだけれども、ベルが鳴れば、何か事情のある方かもしれないとい受話器に手が伸びてしまう。そして、私も遅れがちに出勤。

ここまでで、三十本以上の電話を受けたことになる。二番目の人は、とこれは後から聞いた夫の話。四歳の子のピアノのおけいこにというのも、まるで最初の人と同じ。前にも同じような申し込みをしたところ、一番最初の人に決めましたといわれがっかりしたので、今回は少しでも早くと思って電話をしたとのことである。最初のひとが急いでいた事情がよくわかる。三番目も四歳の子のピアノのおけいこ。次は保育科の学生がピアノの練習用にと。また四歳の子のおけいこ。またまた四歳の子のおけいこ。このひとはしきりに家が近いことを強調した。この後も、四歳の子（中には二歳の子というのもあった）のピアノのおけいこ用というのがなによりも多く、私達はメモもとらなくなった。将来幼稚園の先生になりたいという高校生、教職課程の大学生や保母

の方、趣味でピアノをはじめたおとなのひとなどからも電話を受けた。マンション住民を中心に、幼稚園にはいる前の子どもを集団生活に馴れさせるための会を作っているのだがというのもあった。楽器がひとつもないのだという。その他、火事で高校生の息子が大切にしていたエレクトーンを焼失してしまったのでという母親、オルガンの技術をもっていて教えたいからという若い女のひと、小児マヒの子の手足の機能訓練に是非足踏式という母親などなど、心を動かされる事情のある方も多かった。さし迫った事情というほどでもないひとには、こういう方もいらっしやるのでと説明すると、大抵は理解を示してくれ、却って「大変ですね。」「頑張って下さい。」「と労の言葉をかけられることもあった。これは大変嬉しいことだった。なにしろ、ほとんどの電話に対しては、「御期待に沿えなくて申し訳ありません。」と謝らねばならなかったのだから。中には、初めから貰えるつもりで、音は全部でるんでしょうね。」と聞いてきたり、大きくなければ貰ってあげてもよい、大きいと家にはいらなからと言ひ出す人もいたりしたが、不愉快な思いをさほどしなかったのは、考えてみれば大変なことなのかも知れない。

足踏み式であることは、今や貴重らしい。例えば、大正生まれという女性の話。この人からは何か執念というようなものを感じ

させられた。初めて貰った給料でオルガンを買ったが、疎開のために手放してしまった。戦後買ったものもピアノと入れ換った。今頃になって懐しくなり、あれこれ手を尽して探しているのだが、電気式ばかりで、足踏式が全く見つからない。だから手放すべきではないと説教をしてくれ、オルガンの音の良さを褒める。更には、相応の金額を支払うから自分に譲ってほしいと交渉を始めた。(不用になったらぜひ私にと、譲った人に伝えて欲しいとの達筆な葉書が、翌日、この人から届いた)。こうなると、何だか手放すのが惜しくなる。無理しても置いておこうかしらんなどと思ったりもした。

帰宅してからも電話は鳴り続け、そろそろ電話のベル恐怖症にかかり始めた私達は、その夜、休む前に電話器をこたつの中に入れて、丹念に座ぶとんをかけた。次の朝早くにも、微かにベルが鳴っていたようなのは気のせいだろうか。さすがに二日目、三日目と電話の鳴り方は少なくなり、四日目、六日目にそれぞれ一本ずつ鳴ったが、以後ぼったり跡絶えた。

誰にさしあげるかということでは随分迷った。というのも、私としては本来の楽器らしく使っていただけるところに譲りたいと思っていた。ところが、事情のある方でも、大抵は何かの代用品として、オルガンを欲しがっているようだった。ピアノを手に入

れることができ、あるいはもつと高級なキーボードを得たときには、顧みられなくなるのだろう。それではあまりにも悲しい。かといって、それほど上等な品というわけでもないし。できれば、ちょうど私の子どものときのように、子ども自身がとても欲しがっていて、でもなかなか買ってあげられないというひとがいたらいい。その子がブカブカと存分に楽しんでくれたら、オルガンも本望であろう。結局、私が抱いていたそんなイメージに一番近いと感じられた、十何番目かの電話のひとにさしあげることにした。

息子は小学校一年生で、本人がとても欲しがっているという。主人が事業に失敗して、今新しい仕事が軌道にのりかかってきたが、まだそこまでは手が回らない。子どもも事情はわかっているらしく、区の広報紙を心待ちにしている、その朝になると、ママ、これ来たと持ってくるのだという。

直接持っていくといって車に積んで出た夫は、私が心配した通り、家がわからなかったといってそのまま戻ってきた。その辺りの地理には強いはずの夫でさえ知らないような混み入った場所だったそう。翌日、改めて待ち合わせの連絡してから持っていくと、ストラックスをはいた女のひとが、にこにこ立って待っていてくれた。三角布で片腕をつつた少し太目の男の子が、嬉しそ

うに傍に寄ってきて、「学校のみたいだ。」といった。アパートの部屋（だから昨日は見つからなかった）へ運ぶと、彼は使える方の五指全部でブー、ブーと鳴らしてみた。母親は、指一本ずつで弾かなくてはいけないとやさしくたしなめた。デパートの配送品を届けているような気がしたと、夫は帰ってから話していた。おみやげに、夫は、何種類もの荷造りテープを買ってきた。それは、せめてお茶でもというのを断って（人みしりが強いので）帰ろうとするときに手渡されたもので、以前に仕事をしていたときの製品だという。

数日後、その方からの分厚い封筒が届けられた。「伝統工芸」という雑誌の創刊号であった。主人がすべてをかけて作ったものなのだという。ページを繰ってみると、取材記者、それもただ一人のは当の奥さんのようであった。お礼をしたいのだが、今の私達にできる精一杯のことがこれです。続刊を店頭でみかけるようなことがあったら、仕事が順調なのだと思いますと端正な文字で綴られてあった。そして、最後に、息子は早速二曲ものにしたとあった。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

『ひとりっ子』

その心理と教育

山下 俊郎 著

同 文 書 院

今度三回目の改訂版が出版されたこの書物を通読して、一冊の完結した本であることの印象を深くした。

序章で、ひとりっ子はどうして問題になるかという問いを提出し、前世紀の末にひとりっ子の研究を手がけたスタンレー・ホルルの「ひとりっ子であることは、すでにそれだけで一つの病気である」との言は、果してそうであるか、順を追って検討がなされる。先ずひとりっ子の心理学的研究の系譜が紹介され、ひとりっ子の全体的特異性が研究に従ってとり出され、いつも子どもに注がれる親の目——過教育と、きょ

うだいがいいことからくる社会生活の欠如が指摘される。そしてこのような条件にあるひとりっ子の特異性があるかどうか、実証的研究による吟味がなされ、身体的生活、知的生活、性格特質、社会的生活について、特異性を認める研究と否定する研究とが公正に、簡潔に検討される。そして更に、ひとりっ子は問題の子どもであるかどうかに焦点をあてて論が進められ、周到な検討の結論として、「ひとりっ子であることは、それだけで一つの病気である」といったホルルの言葉は、現在の研究の結果では通用しない言葉になったと、著者の結論を出される。(P二一九)

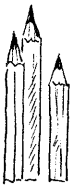
その上で、ひとりっ子の教育を正しい軌道にのせる道が次に考究される。この章では、著者の長年にわたる保育研究の精髓が至るところに簡潔に示されている。たとえば、できるだけ少なく教育することという節を引用すると次のようである。「できるだけ少なく教育する、という表現はちょっとおかしい表現かもしれないが、その意味するところは、なるべく子どもを先に立てて自分からは後からついていくということである。……親の気持ちとしてはなんとかしてやりたい、手をだしたい、なんとかいじりたい、という気持ちをおさえて、た

だ黙ってあとからついていくことである。くるんで包んでしまいたいところをジッとがまんして……」(P二二三) また、ひとりっ子の早熟になりやすい傾向をいましめ、早熟から解放する具体的方法の第一として、「子どもどうしの社会生活の中で生活するように……子どもの中へ解放してやる」ことを強調する。(P二四七) そしてひとりっ子の教育原理の要約として、一、「経験の尊重とその統制」、二、「子どもどうしの社会生活の尊重」を掲げ、これは同時に、教育全般にわたる原理であることを説く。序章から結語に至るまで、何度からせん状に問題が展開されて、この書物全体が美しい形態をなしている。長年の研究と経験によって成熟した著者でなければ作ることのできない書物である。

この書物とは、私自身がまだ大学生だったところからの長いつきあいがある。終戦直後、心理学科の学生にとって、実験心理学以外の心理学を勉強することは大変困難だった時代に、児童心理学の本も数えるほどしかなかった。そんなところに、山下俊郎著『教育的環境学』を読み、心理学の分野で

も、こんなに広い視野で子どもを研究した本があるのかと感激した。この『教育的環境学』は昭和十二年の出版であるが、同年に『一人子の心理と教育』が出版されている。しばらく後に、この書物を手にしたのは、ある私の親しかった友人の書斎の中で、シュテルンの児童心理学のことなど語り合った時だったと思う。彼自身一人子であった。そのときは、まだ未知の分野が洋々と眼前にあった児童心理学のことを、抱負や希望と共に語っていたのであるが、今になって考えてみると、一人子としての彼自身の悩みが心の底にあったのではなかったかと私なりに考えるのである。この友人は大学紛争の直後に亡くなってしまった。この書物は、「ひとりっ子」について淡々と語っているが、四十年間にわたって児童心理学の歴史の中を生きつづけた重みと、著者の保育に対する愛情と洞察を感じさせてくれる。

(津守 真)



『復刻・幼児の教育』

『幼児の教育』一巻―二十巻までの復刻が完成しました。

「我国教育界の刻下の急務は、児童教育法の研究と、母としての婦人教育の普及にある」とうたい上げた創刊号を手にとすると、当時の関係者たちの熱い息吹きが伝わってきます。

明治三十四年、保育界は、創設の混沌の中から、漸く、新しい傾向をつかまえていたのです。

そして、巻を追うごとに、日本の保育の成長の道すがら明らかになってきます。それは、大正期へ向けて徐々に夢をふくらませ、やがて、「誘導保育」という形で華麗な花を開かせていくのです。

従来、この雑誌は完全な揃いがなく、閲覧の困難さが数かかれていましたが、この度、関心を抱く多くの人々の傍におかれるべきものと考え、復刻刊行に着手致しました。過去を問い、現在を考える手がかりとして、広く活用されることを願

っています。

全二十巻、別巻一、A5判、クロス装、外函入、題字・東山

魁夷、別冊記念論集

《一巻―二十巻》『婦人子ども』明治三十四年―大正七年

『幼児教育』大正八年―大正九年

編集委員 津守 真

本田 和子

堀合 文子

〔刊行〕名著刊行会 〔価格〕現金価格 一八六、〇〇〇円

〔申込・問合わせ先〕総発売元・株式会社コーディック

東京事務所 東京都千代田区神田神保町一―四七

大森ビル TEL 東京（〇三）二九五―〇一八六

本社 大阪市東区今橋二―二二 藤浪ビル

TEL 大阪（〇六）二二七―五三四一（代）

『幼児の教育』復刻記念懸賞論文募集

このたび、雑誌『幼児の教育』復刻を記念して、左記の要領で論文を募集することになりました。多くの方々が、優れた論文をおよそくдаетさいますことを、期待しております。

〔記〕

一、復刻『幼児の教育』を素材として、独自の考察を試みたものであること。

一、応募期日 昭和五十五年九月末日まで

一、応募要領 ペン書き（またはボールペン）とし、四百字詰縦書き原稿用紙に四十枚以上百枚以内。上表紙に「復刻記念懸賞論文」と朱書の上、「論文題目」「姓名」「住所」「所属」を記入のこと。審査は上表紙を外し、本文のみを対象

として行ないます。尚、名前入りの原稿用紙は御遠慮下さい。

一、賞金及び賞品 最優秀賞一名 賞金二十万円

二等賞 二名 五万円

三等賞 三名 一万円

参加賞 全員 記念品

最優秀論文は、本誌に掲載いたします。

一、問合わせ及び応募先

〒112 東京都文京区大塚二―一― お茶の水女子大学附属

幼稚園内 日本幼稚園協会『幼児の教育』編集部

尚、電話での問合わせは御遠慮下さい。郵便でお願いいたします。

主催 『幼児の教育』編集部
後援 株式会社コーディック

☆ 世界の子どもたち ☆

オーストラリアの幼児教育

永井 康子

ワンダリング幼稚園

ワンダリングというところ

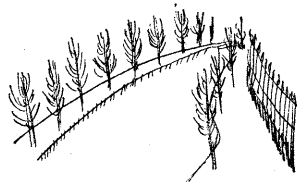
西オーストラリア州の州都パースから二〇km南東へ下ったところに、ワンダリングという町があります。ほんの小さな何でも屋があるだけの、町とは名ばかりのところ。そこから更に草むらをぬって二〇km、ゴアナ（トカゲの一種）がノコノコ歩いているがたがた道を薄茶色の砂ぼこりを

もうもうとあげながら車を走らせると、小さな教会と学校、孤児たちが住むコテージが見えてきます。これがワンダリング・ミッションです。

内地地ワンダリングの夏は、中央の砂漠から強風が吹いてくるため非常に暑く（四〇度C位）、牧場があるので、ハエがうるし声をあげて押し寄せてきます。雨がしとしと降る冬は、四度にまで下がります。

一番近い町ビンジャリーまでは東に五〇km、西の方向にあるボディントンまでは五

五kmもあります。これらの町のお店は、品数が少い上にとっても高値なので、私は毎週金曜日、保育が終わると同時に、パースへ買出しに行きました。ハイ・ウェイの左右は見渡す限り牧場で、昼間は、緑や赤の美しいオウムが車の音に驚いて舞い上り、羊たちもあわてて走りだします。夜は、カンガルーが目の前を横切って行きます。私の車にはカンガルー・バー（カンガルーよけ）がついていないので、緊張して運転しました。大きなカンガルーにとび込まれると、



車がへこんだりヘッドライトがこわれたりして、走行不能になってしまうことがあるからです。

ワンダリング幼稚園

ワンダリング・ミッションは、もともとカソリックの孤児院で、神父さんとシスターが孤児約六〇人の世話をしていたのですが、経営難から管理体制が代わり、孤児は、原住民（オーストラリア大陸に白人が移住をはじめる以前から住んでいた人々の総称）の子ども三〇人となりました。その時私が、この幼稚園の主任として、州教育庁から派遣されました。主任といっても、先生は私ひとり、隣りにある小学校も、校長先生ひとりです。

原住民の「孤児」は、実際に親がいないわけではなく、子どもが多すぎて親が面倒をみきれない（親には定収入がなく、政府の補助金では足りない）、お酒を飲んでばかりいて、子どもを育てる能力が親に全くない、片親が刑務所に入っている上に補助金は飲んでしまうので、子どもにまではま

わらない、等といった理由で孤児院に収容されているのです。ですから、てんかん・盗癖・言語障害等のある子どもたちで、皆、本当の真心のこもった愛に飢え渴いていました。

保 育

保育は朝九時から十二時までの三時間、月曜日から金曜日までの五日制です。先生の勤務時間は一日四時間半です。（八時四十五分から十二時半までの三時間四十五分と、四十五分間のブランニング・タイム）保育内容は自由で、各國の主任教諭に任されています。従って園によってまちまちなのですが、一応、簡単な時間割（表）を書いて貼り出しておくように定められています。保育目標については、毎月、本部に報告する義務があります。

天気の良い日には、よく子どもたちをピクニックに連れて行きました。草むらを歩いて美しいワイルド・フラワーを眺め、様々な木の実を集めます。また、子羊をだいたり羊の毛を刈る仕事を見たり等々、本物

に接する保育をすることができたのは、私自身にとってもうれしい経験でした。

遊 具

遊具は、ジャングル・ジム等本部から送られてきたものの他に、ゴミ捨て場で拾った古い家具やアイロン、トースター、オーブン、フライパン等があります。オーストラリアでは、おもちゃでなく本物を使うように奨励されているのです。

原住民の子どもの身近にあるものは、やはり町の子ども（白人）のそれとはかなり異なります。例えば、動物はヘビ、カンガルー、ゴアナ等です。それで私は茶色い膚のお人形やヘビの親子等を、きれいな模様の残り切れで作りました。

パズルもよく保育に使われますが、市販のものは種類に限りがあり、原住民の子どもに合うものが少ないので、これも自分でいくつか作ることにしました。（原住民の子どもの絵を描いてジグソー・パズルを作ったのが認められて、後にパズルの本部から特別に依頼を受けて原住民向けの新しい

遊具を私が製作しました」

閉園

一九七六年に厚生省の方針が変更され、就学前の子どもは親のもとに置くべきであるという事になりました。子どもを育てる能力に欠けた親のもとに孤児院に居る子どもたちを送り返すことについて、多くの議論が交されました。しかし、園児数の急減、ミッシェンの経営難の深刻化に加え、ベースに新しく開園される原住民の幼稚園に私の転勤が決まった等の理由で、このワシントン幼稚園は閉園となったのでした。

原住民と教育

原住民

原住民は現在、オーストラリアの大きな社会問題となっています。なぜなら彼らは白人のように働かないからです。彼らは、就職しても安定する性格ではないので、フラットどこかへ行ってしまうです。決まっ

た時間に出勤してくることも稀で、雨が降ったりすれば行くのを止めてしまします。そしてついには仕事を失うことになりました。悪循環なのです。

混血原住民は、年々増加しています。白人との混血によって彼らの膚の色は次第に白くなり、遂には原住民の血が混じっていることがわからなくなっています。(劣性遺伝で黒い膚が出現することはないと証明されています。見かけは白人でも、原住民の性格を受け継いでいる人が多く、この混血原住民の数は、主要都市で急激に増え続けているのです。

原住民の幼稚園

前に述べたワシントン幼稚園は原住民の子どものための Pre-Pre-School (二歳半から三歳まで) でしたが、同じ性格の園がいくつかベース郊外に開園し、私は、そのうちの三園を受け持つことになりました。イナルー幼稚園は週三日、ベルモントとベントリーの幼稚園は週一日ずつです。原住民の幼稚園では、それぞれの地区の

厚生省出張所及び保健所との連絡を密にしなければなりません。その上、各園ごとに原住民の実習生と助手が配置されているので、テレビのチャンネルをひねるように自分自身をバツパツと切りかえねばなりません。また、新しい試みの幼稚園であるために、訪問客も絶えません。三園掛持ちはほんとうにたいへんなことで、自分自身が広く薄くなつて行く様な気がしました。(あまり忙しいので、後にイナルー週三日、ベルモント週二日に変更してもらいました。)

助手——原住民の感覚

三園とも、責任を持って働いてくれる助手を得るのにとて苦勞しました。日本と違って、私たちには交通費が支給されません。また公共の交通機関は東京ほど発達していないので、車を持っていないれば通勤はほとんど不可能です。そこで幼稚園の近所に住んでいる原住民の中から助手を捜しましたが、なかなかみつかりません。なしる無資格の人たちですから、俸給が失業手当よりも低く、働きたくないというのが

本音のようです。

どこでも、子どもたちを幼稚園まで送り迎える乗物が必要でした。幼稚園のすぐ近くに住んでいても、親に進んで子どもを送り出すという意欲がないので、一軒ずつ迎えに行かねばなりません。ベルモント園は厚生省のマイクロ・バスを借りて私たち先生が交代で、イナルー園は厚生省のホーム・メーカー（婦人会の係員）たちが、ベントリー園は保健所の看護婦さんたちが、普通乗用車で園児の家まで送迎に行きました。

親子

親の協力を得るのが、また一仕事でした。欠損家庭の子どもが多く、親子の名字が違うのはめずらしくありません。親戚にあずけられている子どももかなりいました。

これらの子どもたちは、確かに放任されています。二cmもナイフで切った真新しい傷口を見せて「ママが切ったんだよ」と平気で言う四歳男児。母親が消毒もしないでイアリング用の穴を開けたために、耳をす

っかりはらせている三歳女児。足がおできだらけの三歳女児……彼らは口をそろえて「ママ、お医者に行くお金ないの」「お酒を買いお金はあっても、子どものために薬を買いお金はないというのです。何とタフな体験をしなければならぬ子どもたちなのでしょう。そんな彼らに楽しい経験の場を与えることが、原住民の幼稚園の目的のひとつなのです。

開園当初、鼻をたらし特有の臭いを発散させていた原住民の子どもたちも、後に保健所の看護婦さん（*nurse*）から、心身共に優れていると、おほめの言葉をいただくまでになりましたが、ついに親（保護者）の協力を得ることはできませんでした。

幼児教育、成人教育

都市に住む原住民はほとんどが混血で、先祖の言葉はすっかり忘れてしまつて、彼ら特有の訛のある英語で話します。オーストラリア内陸から北部にかけての原住民特別区（*reserve*）に住む人々は、昔ながらの彼ら独自の言葉を使います。けれども子ども

もたちはオーストラリア文部省の方針で、幼稚園の時から二か国併用教育（*Bilingual Education*：原住民の言葉と英語の教育）を受けます。親の知らない新しい知識も子どもたちは学びます。ところが大人たちは学校教育を受けていないために子どもの教育が大人の地位損失を招く結果となっていました。

大人にも子どもと同様に読み書きを教える必要があります。（読み書きを教える先生のことを、リタラシー・ワーカー *Literacy Worker* と呼びます。）大人も子どもも母国語を読み書きできるといふことは、彼らの社会の大人と子どもの関係を正しく維持すると共に、彼らの伝統・習慣の保持をも助けることになります。

幼児教育が一番大切だと思つてきた私ですが、この原住民の社会では、成人教育（*Adult Education*）も同様に大切であることを痛感し、ついに一九七七年十二月、西オーストラリア州立幼稚園の先生を辞職して、リタラシー・ワーカーとなる決心をしたのです。

ダンスの変遷史 (一)

表題について、明治以降のわが国の教育の場を中心に述べさせていたきたい。

一、唱歌遊戯のはじまり

明治初期、ダンスは遊戯ということばで呼ばれていたというより、その範疇に入るものであった。その中で唱歌遊戯と称したものが今日のダンスの一つの基礎を成すものであった。この唱歌遊戯は、明治七年、伊沢修二⁽¹⁾によつてはじめられた。

戸倉⁽¹⁾ハル先生によれば、『愛知師範学校長、伊沢修二は、フレールの書に、

『歌うことに動作をつけて行なわせることは、子どもの活動性を増すことである。』

興^{こし}水^{みず}はる海^み

という一文を見出し、これを附属下等小学校に研究させた結果、大いにその効果が認められたので、時の文部省に次の様な建議文を提出した。

『唱歌ハ精神ニ快樂ヲ与ヘ運動ハ支体ニ爽快ヲ与フ、此二者ハ教育上、並ビ行ハレテ偏愛スベカラザルモノトス、而シテ運動ニ數種アリ、方今体操ヲ以テ、一般必行ノモノト定ム。

然レドモ、年齢幼若、筋骨軟柔ノ幼生ヲ激動セシムルハ、其害却ッテ少ナカラズト、是レ有名諸家ノ説ナリ、故ニ今下等小学ノ教科ニ遊戯ヲ設ク。』

この一文が、田中不二麻呂文部卿によつてとりあげられ、東京女子師範学校附属幼稚園は、その調査方を命じられた。そして、豊田英雄女史が幼稚園にあってこれを研究した。』

と述べているが、当時の保姆、豊田英雄、近藤ハマ等が、桑田親吾訳「幼稚園」⁽²⁾、関信三訳「幼稚園記」⁽³⁾等によって、(原著も参考にしたと思われる) 研究を重ね、實際指導に当った。

しかし、それらの直訳ではなく、意のあるところを汲んで、子どもたちに適応するように歌詞をつくり動作を考ええた。音楽は、式部寮雅楽課の伶人によって作曲された。

豊田英雄は「保育の葉」の五、開誘の方法の中で、「保姆は種々新案を以て遊戲に充つる歌詞所作をも工夫し、古きに換へしむる意匠あるべし」と述べ、例として、家鳩、民草、水車、猫鼠、盲ひ、環木、蝶々、此門、兄弟、姉妹、風車をあげている。この中から民草をとりあげてみよう。

幼童遊戲伎譜⁽⁴⁾

民草

初段 播種ノ形状ヲナス

群児手ヲ携テ輪ヲ作り其長者初句ヲ発声ス第二句ヨリ群児一斉ニ謳ヒテ第二句ヨリ手ヲ放チ右ニ向手ヲ左右ニ振り左足ヨリ歩行シ歌ノ止ム迄旋止ス立止テ手ヲ携フ

二段 植田ノ形状ヲナス

(以下、動作を省く)

三段 刈獲の形状ヲナス

四段 獲稲ヲ運搬ノ形状ヲナス

五段 稲コキノ形状ヲナス

六段 稲ウチノ形状ヲナス

七段 終業就眠の形状ヲナス

八段 秋成ヲ賀シ謳テ

「幼稚園」巻下の第十六「農夫ノ歌」、⁽⁵⁾「幼稚園」巻一、其六篇「農夫」を参考になっているが、この両者の内容は類似しているもので、前者と民草を対比してみる。

農夫の歌 (大意をまとめたもの)

其一 大麦小麦ヲ撒ク如何

其二 大麦小麦ヲ刈ル如何

其三 大麦小麦ヲ扱フ如何

其四 大麦小麦ヲ篩フ如何

其五 農夫ノ業ヲ終ルトキ休ム如何

其六 農夫ノ業ヲ終ルトキ其遊フ如何

農夫の歌が麦を扱っているのを、民草では、わが国の農業の根

幹となっている稲におきかえ、八段に増やすなど、苦心のあとが窺われるが、同時にその創造性の豊かさに驚く。歌詞八段は豊田英雄の作になるもので、曲は伶人東儀秀芳であり、明治十一年六月十七日に上申された。

昭和四十四年、第六回国際女子体育会議が東京で開催され、松本千代栄教授によって「日本における学校ダンスの歩み」がレクチュア・デモンストレーションの形式で発表された。教育大附属小学校五年生によるグループ表現は、参会者に多くの感銘を与えた。その一つに「稲の一生」があった。動作は活動的で創造性を遺憾無く發揮していたが、その構成は正に、民草の現代版である。

民草等の遊戲の扱い方について、豊田英雄は「児童の遊びに娯むやの模様を見計らふの事緊要なりとす」と述べているが、今日も、十分に通用することばである。

二、鹿鳴館と舞踏会の手帖

欧化主義の代表的なものの一つとして、明治十六年十一月、不平等条約改正の願いをこめて、鹿鳴館が建設された。鹿鳴館は内外人の社交の中心となり、上流社会の紳士淑女達によって舞踏会が開催された。

この鹿鳴館では、どのようなダンスが踊られたのであろうか。この疑問を解いてくれたのは、江藤淳氏が遠くドイツのキール市立図書館附属のシュタイン文書館において発見した「舞踏会の手帖」である。江藤氏によると、「シュタインの長子、エルンスト・フォン・シュタインが、老齡の父親の名代として来日した際、記念に持ち返った……」中の一つにこの舞踏会の手帖があった。

PROGRAMME ENGAGEMENTS

- | | |
|----------------|-----|
| 1. POLONAISE | 1. |
| 2. QUADRILLE | 2. |
| 3. VAISE | 3. |
| 4. LANCERS | 4. |
| 5. POLKA | 5. |
| 6. CALEDONIANS | 6. |
| REFRESHMENTS | |
| 7. VAISE | 7. |
| 8. QUADRILLE | 8. |
| 9. MAZURKA | 9. |
| 10. LANCERS | 10. |
| 11. VAISE | 11. |
| 12. GALOP | 12. |

このプログラムは明治二十年十一月三日、天長節の夜のもので、小さい鉛筆が付いており、左側はプログラム、右側はパート

ナーの名まえを記入する様になっていた。当夜のダンスは、ポロネーズ、カドリール、ワルツ、ポルカ、カレドニヤンス、マズルカ、ランサース、ギャロップであった。

鹿鳴館の影響は直ちに学校教育にも現れた。東京女子師範学校、秋田師範学校、愛知師範学校では、生徒の服装を着物から洋服にした。東京女子師範学校では、時々、外国人ヤンソンを招いてダンスの練習を行なったり、講堂で舞踏会が開かれた。中川謙二郎は、當時を回想して、「⁽⁹⁾ 恰度私の室の隣りの室が、舞踏を稽古する教場になって居たので、騒々しくって困った。私はダンスが嫌ひでしたから、もう少し静かにしてくれぬかといふと、静にしては稽古は出来ませんと言つて居つた。恰度大きな講堂があつて、舞踏室によかつたと見えて、大学の教授連がよく来てダンスをやつて居つた。坪井玄道君なども体育の方からダンスを研究すると云つて来て居たが、大学の方では穂積陳重、桜井鏡二博士等がよく見える顔だつた。」と書いている。

また、後閑菊野は當時の急激な変化の姿を次の様に述べている。⁽¹⁰⁾「然るにこの頃から世の中の有様は、だんだん變つて参りまして、所謂鹿鳴館時代となり万事西洋風を尚び、舞踏会などが処処で開かれるようになりましたから、学校に於いても時々そのおやどをなさいましたので御座いませう、講堂に朝野の紳士淑女が

お集りになつて、舞踏をなさいました。私は卒業して未だ間もない時でありましたが、附属小学に勤めさせて頂いておりましたから、校長はじめ他の職員の方々と御一緒に此会に出席致しました。……束髪に薔薇の花をさしたり、洋服を新調したり、帽子の飾りに骨を折つたり、苦心致したので御座います。そうして出来上がりしました其様子の可笑しさは、皆様の御想像にまかせます。」しかし、鹿鳴館時代は永くは続かなかつた。明治二十二年には帝国憲法が、二十三年には教育勅語が發布され、社会は急転して国家主義の方向へ向つて行つた。女学生の洋服姿はまた元の着物姿に戻つてしまつた。

この鹿鳴館のダンスは学校教育にも影響した。⁽¹¹⁾明治二十年頃の東京高等女学校（後の東京女子高等師範学校附属高等女学校）では、「あとでダンスを教えるから、まず徒手体操だけはしなければいけませんよ」と、当時流行のダンスにことかけて、ごきげんをとりむすび、体操にご出席をねがつたとある様に、ダンスを授業の中に取り入れた。鹿鳴館時代が去つても、これらのダンスは女学校にひろがつていったと考えられる。例えば、明治二十七年十一月に開催された華族女学（後の女子学習院）の第一回運動会では、ポロネーズ、方形行進が行なわれているし、三十年代以後の全国の小学校高学年や、女学校のダンスの中心教材は、カドリ

ール、カレドニヤンス、コチロン、ランサーズであつたことによつても、おしはかることができる。

三、遊戯時代の到来

明治三十年代になると、体育の授業の中心教材であつた普通体操は形式化して人々の関心を失いつつあつた。その頃、欧米の遊戯事情が坪井玄道、白井規矩郎らによつて紹介されると、遊戯研究宛熱は急激に高まり、同時に、日本遊戯調査会をはじめとする遊戯研究グループが誕生した。そして、大村芳樹、高橋忠次郎等により、「実験的」「最新」「教育的」等を冠した遊戯書が相次いで出版された。一方、川瀬元九郎や井口あくりによつてスエーデン体操が移入され、普通体操か遊戯かスエーデン体操かで体育界に混乱を招いた。そこで、明治三十七年文部省は「体育遊戯取調委員会」を設置した。委員会は翌三十八年十一月三十日の報告書¹²⁾で、学校ニ於て奨励スヘキ遊戯として、

競争遊戯 (例) 綱引、毬送、フットボール、鬼遊ノ類

行進遊戯 (例) 十字行進、踵趾行進、方舞ノ類

動作遊戯 (例) 桃太郎、池ノ鯉ノ類

が挙げられている。

行進運動ハ、主ニ女子又は幼年生に適スルモノニシテ、規律及

び協同ヲ尚ビ、調和及び優美等の審美的情緒ヲ養ヒ、且ツ又身体ノ端正ト举止ノ閑雅トニ慣レシムルヲ要旨トス。尚又此ノ遊戯ノ特長ハ、脚部ノ運動ニアルヲ以テ、膝坐ノ習慣アルモノニ取リテハ、最良ノ運動法ナリ。

十字行進、踵趾行進、及び方舞ノ類、何レモ此ノ意義ニ於テ課セザルベカラズ。

動作遊戯ハ、主ニ幼年生に適シタルモノニシテ、其ノ目的殆ンド行進運動ニ同ジトス。

と述べて、女子と幼年生に適するものとし、その目的を審美的情緒を養ひ、端正なる身体とたちいふるまいのみやびやかさに置いている。また、これらの動作が脚部の運動を中心に行っていることがこの時代の特徴であり、胴体の動きが重視されるのは、一部を除き、ずっと後のことである。

四、運動会のダンス

平素の体育の成果を発表して、体育の必要性を説く目的を持つて、運動会が全国的に開催された。(明治二十年代には遊戯会と称した。)この運動会の演技種目の中でダンスは、唱歌遊戯、行進遊戯と呼ばれて、観衆の関心をひいた。

楽しみの少い當時にあって、演ずる者と観客とが一体になって

いた。年に一度の待ちに待った日、軍楽隊がふん囲気を盛りあげ
る中で、優雅に袂をひるがえしてカドリールが踊られた。「坪内
逍遙博士がダンスの仲間に入られ、我々が足をひいて礼を示す時
に帽をぬがれた姿が今も目にあります」と明治四十年頃を、佐藤
はる女は回想している。これほどに当時の運動会の中で、ダンス
は楽しく、「運動会の華」であった。そして、観衆の女性美の概
念を、かつての静的なことから、動的な美、つまり健康美へと導
いていった。反面、練習のために費す時間、見せる要素の強調、
経費等に問題を残した。

日本女子大学校（後の日本女子大学）の運動会のプログラム
は、白井規矩郎、平野はま子等の指導による、デルサルト式、表
情体操などダンス中心に組まれ、東都にきこえた運動会であつ
た。数多くの新聞雑誌評には「詩的にして、高雅なる、艶麗にし
て優美なる、巧妙なる、悲劇的、瀟洒で高潔、壮快淋漓、高尚、
詩化し、都雅」などの語が見られ、「感情表現」をはかった点と、
花、布等によって空間構成を考えた点に特色が見られる。

わが国の学校の運動会におけるダンスは、重要な位置を占めて
おり、これが学校体育の中でのダンスを確立たらしめ、方法的に
は幾多の変遷を遂げながらも、今日に至ったと考える。また、運
動会とダンスの結びつきが、永い体育の歩みの中で、「ダンス講

習会」を成立発展させた大きな要因であると考ええる。（つづく）

（お茶の水女子大学）

註

- (1) 戸倉ハル「ダンスと教育」、『子供と女子の体育』日本女子体育連盟一九六〇年四月号、83頁—85頁
- (2) 桑田親吾訳『幼稚園』文部省・明治九年一月
- (3) 関信三訳『幼稚園記』東京女子師範学校明治九年七月
- (4) 愛珠幼稚園『遊戯体操』明治十七年七月
- (5) 外山友子「幼稚園事始」、『東洋音楽研究』第43号昭和五十三年七月、42頁
- (6) 芝祐泰編『保育唱歌五線譜』巻一、昭和三十一年十月十六日
- (7) 江藤淳『明治の群像』新潮社、昭和五十一年、98頁—100頁
- (8) 毎日新聞社『一億人の昭和史』一九七七年五月、70頁—71頁
- (9) 中川謙一郎「明治初年の女子教育」、『教育五十年史』大正十一年、76頁
- (10) 校蔭会「生徒の風俗」、『校蔭会史』昭和十五年、27頁—28頁
- (11) 作楽会「あの人もここに学んだ」、『作楽会史』昭和三十七年十二月、11頁
- (12) 井口阿くり外『乙運動遊戯ノ實際』国光社、明治三十九年七月、347頁—353頁
- (13) Koshimizu, Harumi, Wake, Chieko. "UNDOKAI (THE ATHLETIC MEETING) OF WOMEN'S HIGH SCHOOL IN THE MEIJI ERA." International Seminar of Physical Education and Sports History, 1978.

◇園長室の窓から◇

渡 辺 茂

(一) プール

園長室のすぐ前がプールになっている。深さ四〇cm、広さ一四m²、プールサイドも一・五mほどあり、シャワーも洗眼も完備。幼稚園としてはまあまあの方だと思う。三方をブロックで囲んであるのだが、その壁面を先生たちのアイディアと労作で素晴らしい海の生きものたちがえがかれている。鯨の親子が潮をふいて泳いでいる。カニがはさみをふり立てて遊んでいる。いろいろな魚がすいすい。砂地には貝類がそここちに、本当に素晴らしい。

はじめ、プロに頼もうかという話も出たが、なんとか自分たちの手でやってみようと言うことになり、早速塗料や大小のハケを

用意。全体の構想を全員が理解した上で、それぞれの分担に個性を生かして絵筆ならぬハケを揮いはじめる。ブロックの表面のバタが塗料のノビを邪魔して大変手間どったし、形や線がどうもうまく出せないが、でもさすがに幼児を扱いなれている先生方だ、夢のある楽しい海の生物がたちまちの中に出来る。本当にうれしいことだ。子どもたちが来て、びっくりしたり喜んだりする姿を想像すると自然と顔がほころびてくる。

三年前のことだ。今じつとあの時のことを想い出して協力の素晴らしさをぐっと味わっている。

(二) おてこおてこ

園長室の窓からやや斜めに園庭が見え、子どもたちの遊ぶ姿がよく目にはいる。仕事の手を休めて、何となくボカンとした気持ちで眺めていることがよくある。

言うも愚かなことだが、子どもたちはよく動く、実によく動く。ひとりとしてジッとしていない。こうした姿からはよくその子の本来の性格がそのまま出てくるもの。先生方はいつも子どもの中に入って遊ぶばかりでなく、時には窓越しに子どもを眺め、そのナマの姿から指導のポイントを見い出すことも大変大事なことでと思う。

そんなことを考えていたら、比較的親分肌のA子が、おとなしいB子を前にして、自分の指示通りにいろいろとやらせているのが目に入った。A子が「あたま」というとB子が頭へ手をやる。「かた」というと肩へ、「め」というと目に……というように。命令に服従させる快感を味わっているかのようだ。B子はおとなしくそれに応じている。

それを見ていてふと思いついたのが次の歌である。

早速子どもたちと歌ってみる。

「おでこ」という出だしの言葉に興味をそられるらしく、笑い顔でいっしょに歌ってくれる。三、四回ですぐ覚える。そこで両手を使って動きを加える。

「おでこおでこ」……両手のひら

でおでこを

二回おさえ

る

「まゆげまゆげ」……両手一本指

を出してま

ゆげを二回

指す

「めめ」……同じように

して目を指

す

「はな」……指を鼻の頭

へ

単純な遊びだが意外にのってきて

くれる。気をよくして、最後の「は

な」を「みみ」に変えたり、「ほっ

ぺ」に変えたりしてみた。結構楽し

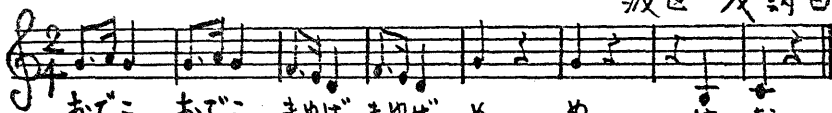
く続けられる。七小節の一、拍休みに、

「あてさせる場所」をタイミングよ

く指示しないと全体の拍の流れがく

おでこ おでこ

渡辺 茂 詞曲



おでこ おでこ まゆげ まゆげ め め

ほ な (み み)

ずれてしまうので注意が必要だと感じる。

はじめは先生がリーダーでやるが、少し慣れれば子どもたちでもやれる筈、リーダーの経験をさせるためにもこの歌は役立つぞと自画自讃。だんだんやつていっているうちに「でべそ」とか「おしり」なんかも出てくる。いやあ楽しい！

(三) かたひじ

暇を見つけてはじーっと子どもを見つめている。何か歌になるヒントはないかと……。そのままうとうと眠くなってしまうことが多いが、時にはボンと手を打って目がキラキラかがやいてくるようなことにぶつかることもある。「しめた」と早速抽出しの五線紙を取出して書きはじめる。こういう時はイッシャセンリ、まことにすらすらと出てくる。うれしい。幼稚園にいて本当によかったなと思う。

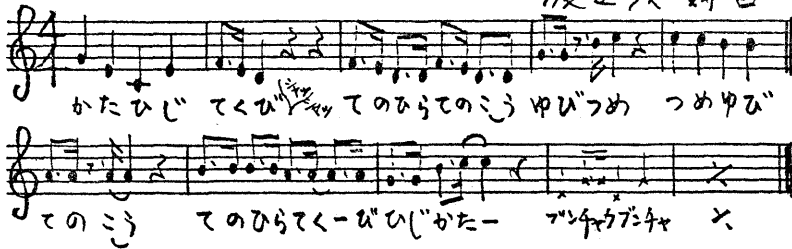
なにしろ、実際の保育はベテランの先生方を中心に全員協力でやってくれるから、こっちの口出すものはない。

好きな「歌」でも作っていればいいのだから、なんと幸せなごとか。それだけに「なんとか」していい歌を作って子どものために役立たせなければと、いささかボルテージが上がってくる。

そこで出来上ったのがこの歌。

かたひじのうた

渡辺 茂・詞・曲



『おでこおでこ』の歌の発展として、やや高度になっている。同じく名詞の連続だから、小生の代表作『たぎび』の歌のような叙景的叙情的要素はない。その点ではムミカンソーだが肩からひじ、手首、手のひら、手の甲、指、つめとその順序を正確に覚えてスムーズに歌詞が流れることがねらいなのである。ぼやっとして人のマネばかりしている子はなかなか流れにのれない。「次は何」「次はどこ」とはつきり意識して歌うことをねらいたいもの。これは日頃から、先生の話をしっかり聞いて、それによって行動する（マネで動くのではなく）という生活習慣を身につけるためにも役立つ歌であると、これまた自画自讃。

もちろん、身体表現を伴うこと



は言うを待たない。それぞれの部位を流れにのって表現するが、指導の順序としては前半後半と分け指導する方がよさそう。ブンチャカという合の手も楽しい。

ひじ、手の甲の名称を知らない子が多い。「手首」のあとの二拍休みに「ジャッジャッ」が自然に出てくるのも楽しい。

(四) ストレス解消

どんな学級にもガキ大将がいるし、いじめられっ子、めそめそ泣きっ子がいるものだ。いじめられたり泣かされたりはしないまでも、そのガキ大将に対しては何等かの心理的ウツケツがある子が多い。そうしたストレスを解消してやるための一つの方法として、みんなに「やーいガキ大将」の歌をうた

わせたことがある。これは可成り効果があったようだ。一対一ではとても口に出出来ないような歌を先生やみんなといっしょになつて心ゆくまでうたう。

やーい やーい ガキ大将 よわいの いじめは やめろよなのところは期せずして大声になる。弱者の悲しき叫びでもあろうか。しかし注意したいことは絶対に「ガキ大将」と目される個人を指さないことだ。

先生が小さいころの話として、いじめっ子ガキ大将のこわいのがいて、いつも何等かの抵抗を感じていたことを、例をあげて恐ろしげにまた楽しげに話をしてやってみたら、この歌がぐーっと生きてくるだろう。

殆んどのおとな(性別関係なし)が、子どものころに経験しているであろうから、子どもたちへの話かけにはあまり難しさはなからうと思う。おもしろいことに、ガキ大将いじめっ子と目されている子どもでも、結構他のガキ大将いじめっ子にやられている場合が多いものだ。それだけにみんなでこの歌をうたう時、ガキ大将いじめっ子と目されている子ども自身が結構楽しんでいっしょになつてうたっているんだからはえましい。二番の歌詞は「弱むし、泣きむし、みそっかす」のような子を元にさせるためのもの。みんなで愛情こめて歌ってやりたい。(東京・弥生幼稚園)

ルソーの夢

——むすんでひらいて考——（その十四）

海老沢 敏

九、ルソーの夢変奏（承前）

《ルソーの夢》が、フランスのポピュラーなロマンス《ルソーの新ロマンス》ないし、イギリスの同種の歌曲《メリッサ》の旋律にもとづいて、ヨハン・バプティスト・クラマーが変奏曲主題に改変し、かつこの主題によって十個の変奏曲を作ったものであることは、すでに詳細にあとづけをおこなったが、この変奏主題としての《ルソーの夢》は、その後、他の作曲家によっても、

おなじく変奏主題として、また編曲の対象として取り上げられるのである。

たとえば大英図書館が所有している楽譜にトマス・バトラ（一七五五—一八二三）作曲の《ルソーの夢》、主題と十の変奏曲^{（注1）}がある。トマス・バトラは宮廷礼拝堂の少年合唱隊員をつとめたあと、イタリアに赴いて、著名なナポリ派のオペラ作家ニコロ・ピッチーニについて作曲を学んで帰国し、ロンドンの有名なオペラ劇場ドルリー・レインで座付作曲家をつとめた人物であった。そのあと、バトラはエジンバラに移り、音楽教師として活躍しており、多数のピアノ曲を書いているが、おそらく一八一五

年ごろと刊行年が推定されるこの《ルソーの夢変奏曲》の出版地はほかならぬこのエジンバラなのである。クラマーによる《ルソーの夢》がいかに急速にひろまっていったかを示す実例のひとつといえよう。

(注一) 《Rousseau's Dream. An air with ten variation for the Piano-forte. by Thomas H. Butler. Edinburgh, 1815? fol.》

しかしながら、バトラーのごときいわゆる群小作曲家にとどまらず、当時、すなわち一九世紀初頭にヨーロッパ中にひろく知られていた音楽家も、この《ルソーの夢》の普及伝播に一役を買っていることは注目されてよいであろう。

それは当時のフランスでハープ音楽の權威と謳われていたフランソワ・ジョゼフ・ナデルマン(一七八一—一八三五)がそのひとである。従来一七七三年ごろパリで生れたとされていた彼は、フランスの誇るハープ演奏家ならびに作曲家として名高い存在であった。父親のジャン・アンリは一七七〇年代には音楽出版ならびに楽器制作で活躍しており、こうした仕事も、息子によって引き継がれていくのである。彼フランソワ・ジョゼフは、著名なハープ奏者クルンプホルツの弟子であり、一八一六年王制復古時代に

入ってから宮廷ハープ奏者に任じられたほか、一八二五年には、はじめて設けられたバリ音楽院のハープ科教授の地位に就き、死ぬまでこの職にあった。

そのナデルマンに《J・J・ルソーの夢によるハープのための幻想曲と変奏曲》^(注2)なる曲がある。

(注2) 標題を全部訳出しておこう。《J・J・ルソーの夢によるハープのための幻想曲と変奏曲。レジオン・ドヌール勲章騎士、王立室内楽団作曲家、国王付首席ハープ奏者F・J・ナデルマンにより、エリザベト・オゲル男爵令嬢のために作曲献呈。作品六〇、価格四フラン五〇サンチム。パリ。ナデルマン、特許状所有者。ハープ製作者、出版者、国王御王業譜楽器商。リシュリュー街四六番地……》(《Fantaisie/et Variations/Pour la Harpe/sur le Songe de J.J. Rousseau/Composées et Dédiées/à Mademoiselle Elisabeth/Baronne d'Hogguer/par F.J. Naderman,/Chevalier de l'Ordre Royal de la Légion d'Honneur, Compositeur de Musique de la Chambre du Roi et premier Harpiste de S.M./Œuvre 60. Prix 4f50c/A Paris/Chez Naderman, Breveté, Facteur de Harpes Editeur Marchand de Musique du Roi, Rue de Richelieu, No. 46, à la Clef d'Or, passage de l'ancien Café de Foi.》)

▼ 譜 例 ①

Le Songe de Rousseau
Poco più lento. Francis Joseph Naderman

THEME
 Andantino

The musical score is written in B-flat major (two flats) and 3/4 time. It consists of six systems of staves. The first system includes a vocal line (labeled 'THEME') and a piano accompaniment (labeled 'Andantino'). The tempo is marked 'Poco più lento.' and the dynamics include 'p' and 'Rf'. The score ends with a double bar line.

ナデルマン自身の肩書によって、この曲の作曲と出版とが、一八一五年の王制復古以後におこなわれたものであることが理解される。曲は〈幻想曲〉と題されたアングロ・マエストーソのフットロブ・マクシス、〈序奏〉（ハ長調、二分の二拍子）を伴うもので、三十六小節のこの導入部のあと、ヘルソーの夢とフランス語で訳された主題がアンダンテ・イノ、ボコ・ビウ・レント、ハ長調、四分の四拍子で続くのである。前節、後節とも八小節からなるこの主題は、ナデルマンによってハーブ用にふさわしいかたちで、すなわち分散和音や上行音階にいろいろと改変してまとめられている。

（譜例①） つづく変奏曲は合計七曲あり、三連符に飾られた第一変奏、十六分音符の分散和音が高音をいりどる中に主題が見えかくれている第二変奏、六度と三度による主題が低音、高音、低音と交替し、それを十六分音符のパッセージがいろいろ第三変奏、〈エレガント〉と指示された早い長短短のリズムの第四変奏、レガートの第五変奏、そして〈ミニノーレ〉と訳された第六変奏は短調ではじまり、後に〈カプリッチョ・グラツィオーソ〉の部分に伴なっている。そしてフィナーレとしての第七変奏はふたたびハ長調をとって、華麗なハーブのひびきをひびかせてから、最後に主題を再現して終るのである。〈ミニノーレ〉を含み、ハーブの

音色を生かしたからやかな変奏曲ではある。

じつさいの曲については、現在のところ、未確認のものながら、〈ヘルソーの夢〉にもとづいた作品には、なお、次のようなものがある。

ウィリアム・ポール編曲《今まさに夕べのぼんやりとした影が溶け合い》^(注3)（一八二五年）。

T・チャントリー《ヘルソーの夢——ピアノのための大幻想曲》^(注4)（一八五二年）

C・ブラックショウ編曲《ピアノのためのルソーの夢》^(注4)（ロンドン、一八五八年）

フランツ・シューベルト《ピアノのためのルソーの夢》^(注5)（ロンドン、一八六〇年ごろ）

（注c）《Now while eve's soft shadows blending, written and adapted to the air of Rousseau's dream by William Ball. 1825, fol.》

（注4）《Rousseau's Dream. Grand Fantasia for Pianoforte by T. Chantrey. 1852.》

（注5）《Rousseau's Dream for Pianoforte by Franz Schubert. Brewer & Co., London, c. 1860》⁶⁾なみに、このフランツ・

シューベルト一八〇八——一八七八）は、有名なフランツ・ペーター・シューベルトではなく、十九世紀ドレーズデンの音楽家で、ヴァイオリン奏者で、同地の宮廷楽団の首席奏者をつとめた人物である。

このように、クラマーの変奏主題は、十九世紀にあつて、ヨーロッパ中で、多大な反響を呼び起したが、それはこうした芸術音楽の世界でも同様であつたことがたしかめられるのである。

十、遊戯歌としての《ルソーの夢》

《子守歌》としての《ルソーの夢》は、前章に引用したマッカスキーの言を繰り返すまでもなく、まだみずからは歌うことも知らぬみどりごを、眠りに、そして夢にいざなうものであり、そうした《子守歌》の極致としてそれは評価されたものであつた。それはそうしたみどりごの状態からいくぶん成育し、そこで歌われる歌詞が理解できるような歳ごろともなると、その旋律は歌詞の意味に相应してその歌唱表現が変化し、変容してしかるべき姿が要求されるような《歌の中の歌》でもあつた。《ルソーの夢》

は、こうして心の中に深く染み入るような魂の歌として、十九世紀の英国やアメリカで幼児のために歌われつつけていったものである

だが、この旋律は、もうひとつ別のかたちで子供たちの心を、そして身体を捉えていったものでもあつた。

刊行年は不明であるが、ロンドンで次のような《キンダーガルテン歌曲集》が出版されている。《キンダーガルテン・リーダー「改訂増補版」》。ドイツ語および英語の歌詞つき。ロンゲの入門書に収められた三十二曲の歌曲を含む。第二声およびピアノ導入の伴奏つき。J・F・ボルシツキー編。ロンドン。タヴィストック・スクエア、タヴィストック広場三十二番地、教育音楽出版者J・F・ボルシツキー^(注1)刊《

(注1) 《Improved and Enlarged Edition/KINDERGARTEN LIEDER, with German & English Words/Containing the 32 Songs in Ronge's Guide./Arranged with an/Accompaniment of a Second Voice./and/Piano-Forte Guidance. (Ad lib.)/by/J.F. Borschitzky./London:/Published by J.F. Borschitzky, 32, Tavistock Place, Tavistock Square, W.C./Publisher of Educational Music.》

▼ 譜 例 ①

2. *Ein schönes Andlick. The pleasant Sight.*

1. Un - der - neath the vault - ed
2. As our pa - vents, so should
3. Peace - ful words should pass a -

1. Un - term - bin - en Him - mels -
2. Such zum Spiel, zur Ar - beit -
3. Gleich me - lo - di - schem tie -

zeit, gibts Nichts könn - res in der Welt, als die
zeit, Ein - tracht, Lieb' und Freund - lich - keit, füll der
sang, lä - net, gu - tet Wor - te Klang, und ein

sky Fair - er light ne'er meets the eye, Than the
we Live in yface and har - mo - ny: Fol - low
round, Like a sil - ver tramp - els sound. Then the

Ju - grand wach - sen schön, und im Gu - len ver - wirts
gu - len Kin - der Brust mit der wah - ren Her - zens
freundlich An - ge - sieht zeigt, über wahr und gü - tig

young, who, day by day, Grow in ev' - ry lov - ing
their ex - am - ple kind, One in heart and one in
way in which we walk, Oc - cu - pied with such sweet

grün: züh'n'ren An - blick giebt es nicht un - term
Lust: nur im fried - li - chen Ver - ein könn - nen
sorget, gu - te That und fro - her Muth bleibt des

way. Oth - er sights and sounds of bliss Must in
mind: Seek - ing each, not his a - lone, But an -
talk, Will a - bund in joys un - told, And our

hes - sen Non - nen - licht.
sie recht glück - lich sein.
Le - bens höch - stes Gut.

sweetness yield to this.
oth - ers, as his own.
path seem pay'd with gold.

この《キンダーガルテン・リーダー》の第二曲として、ほかならぬ《ルソーの夢》の旋律が収められているのである。(譜例①)それは《美しい眺め (Ein schönes Anblick. The pleasant Sight)》と題されていて、へ長調と四分の四拍子を抱り、大譜表で書き出され、かつ、四小節の前奏、ならびに後奏を伴なっており、それがピアノで演奏されることは、標題からも明らかである。そして《ルソーの夢》の旋律は六度あるいは三度の音程を下に伴なうて歌われるもので、それはそのままピアノの伴奏の右手となり、それにピアノの左手の低音が分散和音の動きで加わっている。さらに歌詞は、大譜表の上にドイツ語が三節、あいだに英語の歌詞がおなじく三節訳されている。

この《キンダーガルテン・リーダー》ならびにその中に収められた《ルソーの夢》の存在から、およそ次のような事実が明らかとなることだろう。第一に、この曲集は英国における《キンダーガルテン》の運動と密接なつながりをもって刊行されていること。それは標題にみられる《ロンゲン》なる名前からも、その他の理由からもしかめられるが、この点についてはやがて詳述することとなるだろう。第二に、《ルソーの夢》の旋律は、こうして、はじめから英国の《キンダーガルテン》の幼児教育体系の中に取り入れられていたこと。こうした点を明らかにするためには、フ

レーベルによってはじめられたこの《キンダーガルテン》、すなわちフレーベル幼稚園の英国への移植から語らなければならぬ。

(つづく)

(国立音楽大学)



現職研究レポート

その二 R幼稚園の場合

角 能 清 美



昭和五十三年度の幼児教育現職研究会は、例年と活動内容が異なり、研究協力園の保育者たちがそれぞれの幼稚園を実際に観察し、各園のもっている独自の特色や問題点を明らかにしようとしてきたものである。

R幼稚園の公開観察日は、昭和五十三年十一月十四日であった。雨模様であったが、子どもたちは、幼稚園にいろいろな思いでやってきて、一日を過ごした。

子どもたちは、ほぼ一日中、自由に遊んでいるが、保育者がそれぞれの子どもたちとたいへんいいねいに、細かく関わっている

ことが、この幼稚園の特色ともいえる。保育者が関わったことで、子どもたちはどのように変化したのか、また、関わる際に、保育者はどのような思いで関わるのかなどについて、保育者の間で細かな話し合いがもたれている。

まず、保育者が子どもとどのように関わっているのか、事例を掲げよう。

事例

三歳児M男は、「ぼくはのりものにのりたいの」と言う。M男は片手にブロックをもち、自転車に乗ってホールへ行く。(廊下は自転車でも走ってもよいことになっている) 自転車に乗って、ゆっくりペダルを踏んでいる。(ホールの中はいろいろな遊びで、子どもたちが右往左往しているのにM男は広々とした所にいるかのようである) そこへA男が「バンバン」と言って、M男に対してピストルの手つきをする。M男も手にしているブロックをピストルに見たてて応戦する。(しかし、M男はA男の遊びに積極的に関わりとうする意志はみえなかった) そこへ(T) (保育者)が、「あ! やられそう」「あ! うたれた」などと言いながら、M男とA男との戦いに大きく関わる。M男は自転車からおりて、本格的に戦いはじめる。「バキューン、バキューン」と言いながら一生懸命に応戦する。(T)はままごとのコーナーの子どもに声をかけられ、戦いから脱けると、M男とA男も戦いをやめる。M男は思い出したように自転車に勢いよく飛び乗る。(T)は、そんなM男に「いってらっしゃい」と声をかけた。M男は「おや?」という顔で(T)を振り返って見るが、だまって走っていく。

(A幼稚園M先生の記録より)

ここでは(T) (保育者) がごく自然にM男やA男と関わり、そして脱けていく場面がとらえられている。(T)が遊びに参加したことで、何気なく自転車に乗っていたM男と、そんなM男に関わりを求めたA男との関係が、より密接になったわけである。もしTがこのときに関わらなかったら、二人がこれほどまでに熱心に「戦い」をしたかどうかかわからない。ところが、(T)がままごとの子どもたちと呼ばれ、「戦い」から脱けたあと、二人は自分たちもやめてしまった。M男は思い出したように自転車に乗るのだが、(T)から「いってらっしゃい」と声をかけられたことは意外に思ったようである。(T)にしてみれば子どもの仲間としての「戦い」の相手である自分と、「いってらっしゃい」と声をかけた自分とは、どちらも保育者としての配慮ある言動であるのだが、M男にしてみれば、つい先ほどまで「戦っ」ていた、その相手から「いってらっしゃい」と声をかけられて、とまどいを感じたのかもしれない。子どもが自由に遊んでいるところに保育者がどのように関わっていくのかという課題は、多くの幼稚園がもっていることである。

M男は(T)から「いってらっしゃい」と言われ、意外そうにするが、そのまま走り去る。この場面では(T)の思いとM男の思いがすれ違ってしまったといえよう。しかし、(T)の関わりによって、子

ども自身が手がけている活動が明らかになり、生き生きと動き出すこともまた多いのである。

事例

M男が自分でも何を作ったのかわからないが、漠然とブロックを手にしているとTが声をかける。

(T)「M男くんのブロックは、まあ、そこがうえにうごくんですか。すごいですね。」

(M男はブロックの一部を上下させている。)

M「うん。こうもなるんです。」(早く動かしてみせる)

(T)「まあ、すごいですね。これはなんですか？ はしごしゃみたいですね。」

M「はしごしゃ、はしごしゃ。かじはどこですか？」

(T)「でんわできいてください。」

M「かじはどこ？」

(T)「あつ、あつちです。」と言って、ホールへ移動する。M男はブロックの上下する部分をホースのようにしてもち、Tの後からホールへ移動する。

(T)「あ！ もえています。そこです。そこです。」

M「ジャー、ジャー」と夢中で水をかける様子をする。A男も加

わって消す。

(T)「あ、ここはきえました。あそこがまだです。」

M男とA男は夢中になって、台の上に乗ったり、かけ出したりして、いそがしそうに消す。

(T)「ありがとうございました。また、でんわできいてください。」
M男とA男は、満足しきった様子である。M男はその後、ブロックをたいせつそうに、ホールの床上を走らせたり、そっと棚の上においたりして、他の遊びをした。昼食のための片づけのときに、M男は「消防の人、ながづはいるの」と言い、上ぐつははこうとしなかった。

(A幼稚園M先生の記録より)

この場面では、完全に保育者がM男の遊びを導いている。何ができたのか曖昧なM男のブロックを見て、どのように動くのかを興味をもったのも、また、「はしごしゃ」というイメージを出したのも保育者である。「はしごしゃ」というイメージからM男は「かじ」を連想する。そして再び保育者がホールへとM男を導いて、消火活動がおこなわれたのである。A男も途中から参加し、M男もA男も満足する活動ができたのだが、保育者のイメージと子ど

ものもっている活動のイメージ（遊びたいのだが、何をしてよいかわからないという状態であった）がびったりと一致したと考えてよい。

子どものひとりひとりの欲求にこたえていくことはむずかしいが、保育者の出したイメージが子どもに適したときには、大きな喜びとなって保育者にはね返ってくるものである。ひとりひとりの子どもが満足するような対応の仕方、あるいはことばがけは、いったいどのようにしたら可能になるのだろうか。R幼稚園の場合、これを可能にするために、保育者が子どもについて気づいたこと、自分の保育を振りかえって見ることを行なっている。これをすることによって、自分の保育が見え子どもが見えてくるのだと思う。

次に掲げるのは、四歳児Nを中心に一人の保育者がどのように関わったのか、そしてまた保育後、幼稚園の保育者全体がそれをするようにとらえるのかの一例である。

Nは、少し乱暴な子どもであり、幼稚園の中ではしばらくの間、ボスの存在であった。しかし、他の子どもたちが成長したため、Nの言いなりにならなくなっている。この日はNは珍しく一人でいた。

観察日 十一月十六日

対象児 四歳男児N

記録 保育者M

8:50 約三分の一の子どもたちがすでに登園している。かなり多く（あとで調べると、バケツ五杯分位）の落葉が、園庭の端に吹きだまり、山になっていた。そこで私は、子どもたちを迎えて後、ちりとちりとうきを持って園庭に出た。私はさっそく保育室のテラスの前に落葉をはき集める作業をはじめた。それを横目で見ながら「おはようございませう」と私に声をかけて部屋へ行く子。すでに私の回りには四、五、六歳の男女児数名。気が付いたらNがいる。そこへ横目で通りすぎていった子どもたちもかけてきて七、八名になる。

8:55 四歳女児「せんせい、なにしてるの？」 M「何だと思ってる？」と落葉をほうきで集めて山にしなから言った。

私は、はじめは掃除のつもりだった。

M「たくさん、葉っぱあるでしょ？」

五歳男児「風が強いからね。」

M「飛んでいっちゃう、ほらはら」と葉を指さし、二、三

名で風で舞う葉を追ったり、くずれた葉の山を直した。見ていた、四、五名の子どもたちも葉を追って遊び出した。

④「黄色の葉、かわいいでしょ。」

四歳女児「赤いのだってあるよ。」

⑤「ほんとね」

五歳女児「たくさんあるね。」

⑥「百くらいかしら」

五歳女児「ええ、もっとあるもん。」

⑦「そうかもしれないわね。」と言って葉の中にすわって、

足を葉の山につっこみ身体を小さくする。

たしかに何百枚もの葉であった。Nは、直接会話に参加しないが、やはり舞う葉を追って楽しんでた。ときどき私の足の上に葉をのせる。山が高くなると、ちりとりであたりにまいたりする。他の子は、これを見てすぐに葉を集めに行く。Nは集まった葉を他の場所に移しかえる。他の子どもたちはこのNの行動を迷惑にも感じていない様子で、葉の山をつくったりして楽しんでた。

ここに約十分間の活動の記録が述べられている。この十分間の

記録から、保育者たちは次のようなことを考えている。

この日の落葉は、子どもに訴えるもののある素材であった。

保育者のつもりとしては現実的な「清掃」として、葉をほうでぎ集めていた。これを子どもは「何してるの?」と保育者に問うている。子どもにとって、集めた葉を捨てるのか、それともこの葉で遊ぶのかということなのであろう。落葉を掃く音はリズムカルで、子どもも詩人になれるような朝の風景である。保育者は、子どもへの問いに対しては、「たくさん、葉っぱあるでしょ。」と答え、本来の自分のつもりである清掃のことにはふれていない。子どもにたくさん葉の扱いの選択をまかせたということになる。このような保育者に対して、子どもは「うん、風が強いからね」と答えている。これは葉が落ちるまでの過程がすべて含まれている答えである。保育者は、風で舞う葉のあとを追ったりする。そして子どもたちも葉を追ったり、葉の山を直したりする。このような経験のあとで、子どもは、葉がたくさんあることに気づき「たくさんあるね」と言う。保育者は「百くらい」と数で表わすが、子どもは、数では言えないくらいにたくさんあることを強調している。そこで保育者は、この子どもの気持ちを受けとめて、落葉の山の中に足をつっこみ、身体を小さくする。すなわち、この保育者は、落葉の山の中に体をうずめてみせ、落葉がたくさん

あることを身体をつかって表わしたのである。

そこへNが、子どもたちの状況をこわすような存在として参加する。他の子どもが作っている葉の山を散らすのである。けれども、他の子どもたちはNのことではちっとも困らなかった。Nが運んでいってしまう葉の量よりも、周囲の落葉の方がかなり多かったせい、Nの行動が全く気にならなかったであろう。N自身は、他の子どもたちよりも、自分に関わってほしいと保育者に伝えたかったと考えられる。他の子どもたちが向いている保育者を見て、Nは不安になったのである。他の子ども遊びを妨げることによって本来なら、保育者から「Nちゃん」と声かけられる。そこでNとしては安心できるのであるが、たくさん落葉が、保育者をも詩的な気分にしたらせてしまい、保育者はNに声をかけなかったのである。

この後、子どもたちの活動は次のように続いていく。

9:05 風がやむと自分で葉を散らす三歳女児がいた。「ゆきのよう」という声も聞こえた。他の子どもたちも山積みされた葉を手で舞いあげた。葉の山がほとんど平らになってしまふと、子どもが葉を舞いあげる時に、葉と地面の土まだけが散るようになった。散った葉や土を懸命にはらつてい

る五歳女児もいる。また襟に土がはいり、困ってしまう子どももいる。これまでは、葉を空に向けて舞わせていたのが、他の子どもに向けて葉を投げる活動になってき、(そのときの遊びの様子は雪合戦のつもりかなと思った。しかし土が目にはいり、泣き出す子が出たり、誰のせいだといって遊びが中断されると私は思った) そこで、「目に土がはいるといいんだから……」と言い、遊びが中断されないで、子どもに工夫したり、加減してほしかった。このことばで、山をつくり直すことなどをしたりする子どももあらわれた。けれども相変らず両手で葉をとって、私に投げつける。私は目にゴミがはいりそうだといって困ってみせるが、Nはやめようとしなない。他の子どもが葉の山をつくっているすきを見ては、ちりとりで散らしたりする。低くなった葉の山を見ておどろく私の反応を喜んでいた。そこで「Nちゃん」と軽い口調で呼ぶとNはにやにや笑い出す。なおも、あれこれと注意を引く行動をとるNと、「どの葉が好き?」「これ。」「そう、せんせいも。」と会話をした。

これは、九時五分から約二十分間にわたる記録である。葉を自

らまきだした子どもであるが、葉だけではなく、土までも空に投げ出した。そこで保育者は、土が原因となつて、泣き出す子どもがでたら、この遊びが中断してしまうのではないかと考えた。保育者は、この遊びを続けてほしいが、土は投げてほしくないとはい、その気持ちをもどくように表現したらよいか、判断に困つてしまう。そんな中でNが保育者に対して土や葉を投げる行為は、他の子どもたちとは異つた意味をもっていると考えられる。Nは、土や葉を保育者に投げることで、「ぼくはここにゐるよ」と主張したととらえることができる。保育者はNに対し、やさしく「Nちゃん」と答えてやる。Nは、やっと保育者と関わることで、き、ほつとして、うれしそうにやにや笑ひ出したのである。この後、しばらく落葉と関わつていたNは、ひとりでブランコに乗り、保育者を呼ぶ。保育者は手を振つて答え、Nの「おして」という要求にこたえてやるのである。

ここには、一日のうちのわずかの部分の記録と、それを保育者がどのように考えていくのかの例を示したものである。実際にR幼稚園の保育を観察し、またこのような報告を聞いた多くの他幼稚園の保育者からは次のような感想、意見が述べられた。

子どもが、幼稚園の中で「生活している」姿を感じる。それは、ひとりひとりの子どもとの関わりを細かくとらえようとしていることから感じるものであらう。子どもたちがどのように遊んでいる、その遊びがどのように発展していったのかという遊びを中心にとらえるのではなく、ひとりひとりの子どもが、きょう一日をどのように過ごしたのか、保育者や他の子どもたちとどのように関わつたのかをていねいに見ていくことによって、子どもの成長を把握していつている。けれども、子どもが要求したことで、保育者が子どもに提したことと食い違ふこともある。その食い違ひをひとつひとつとらえて、保育を振り返つてみることによつて、一層子どもを理解していくことができるのである。「〇〇の遊び」のように概念的にまとめてとらえるのではなく、子どもがゆつたりと生活している中で、それぞれの子どもに適した関わりを考えている保育である。

R幼稚園では、保育者たちが、それぞれの子どもが、いまどのような発達過程にあるのか、そのためにどう関わつていくのかを話し合つてゐる。そこで、子どもたちは「幼稚園」にきてゐるというのではなく、家庭の延長線上に幼稚園があり、ゆつたりと過ごしているのである。

(秋草学園短期大学)

遊びの抱え方に関する一考察

——子どもの世界への接近の可能性——

入江 礼子

はじめに

この小論は、母親であり研究者であるという立場にある者として行なう保育の実践的研究の一環として、子どもの遊びをどう抱えて彼らに接していくと、少しでも彼らの世界に近づいていくことが可能かを考えていく。

私が何故このようなことを重要であると考えようになっただかと言うと、その第一に、遊びというものがいわば幼ない子ども達の全生活であると言えるからである。特に子どもという存在は、幼なければ幼ないほど大人の助けを必要としながら発達していくものなので、その遊びを大人の側がどう抱えるかによって、その子らの生きている世界が抱えられるか否かが決ってくる。保育というものは言うまでもなくこのように子どもと大人の相互関係作

用である。又、第二に、私の数少ない保育体験から考えてみても、子ども達が成長したとか、より深く豊かに発達していったと感じとることが出来るのは往々にして何らかのきっかけから大人（保育者）の側が、自分の接している子ども及びその遊びに対して興味を持ち、今迄以上に理解と共感を持てた時のように思える。こういう事実に幾つか接してきた私にとって、子どもが深い成長発達を遂げる伏線として、どうしても保育者の子どもの遊びを抱える態度や抱え方そのものを問題にせざるを得ないのである。このようにすこしでも深く子どもの遊びを抱えられるならば、そのこと自体が保育を通じ子どもの側に反映して、彼らの世界を豊かにしてくれるであらうし、子どもと共感出来る土壌があれば、保育関係もより深い発展を遂げていくといえるのである。

しかしながら残念なことに、大人は自らの子ども時代を遙か昔に通り過ぎて来たために、子どもとの共感の土壌がひどく狭いことが多い。更に加えて日常生活の能率などを考えることも多く、子どもの遊びを、自分の持つ諸々の枠内で把えて、遊びの本質を見落しがちである。このようにみえてくると、子どもの世界に少しでも近づこうと、より深く遊びを把えようと考えても、その壁は余りにも厚いのである。そこでここでは、その壁となることを考えることも考慮に入れつつ、事例を参照しながら、この目的である子どもの世界への接近の方法を模索していこうと思う。

子どもと共なる生活の特徴

子どもと共に日々を過ごしていると、子どもの遊びを楽しく感じながらその場に居られる時と、何となくつまらないと思いつつその場を過ごす時の二つの場合がある。日常の家庭保育の場合などでは、保育が生活の中に完全に溶け込む形で含まれているので、時間が区切られている保育の場と違い、保育者が、四六時中緊張して保育を進めることが比較的難しく、情性にも流されやすい。その結果、何となくつまらないと思いつつその場を過ごすことも多くなりがちである。ところが子どもと、保育者である私自身のお互いの生活が豊かにかつより深くなったと思えるのは、

遊びを楽しく過ごした後である。つまらないと思いつつ過ごした後にくるものは、子どもとのつながりが切れた感じやら、過ごしている間に子どもに対して否定的な言動が多かったと後悔の悪い思いをすることやらである。子どもと二十四時間共に居ながら、近すぎてかえって良い保育関係が保ちにくいと言えるのである。子どもと共なる生活には、このように保育者の側で気をつけなければ、子どもと共にどんな場よりも楽しくつきあえる可能性がある反面、そのような落とし穴もあるのである。

以上のような特徴をふまえて本論に入ることにしたい。

事例について

ここに挙げる事例は私自身の子どもAの一歳〇か月から六か月までの間の日々の保育生活記録をもとにしている。(Aは女児)尚、記録はすべて思い出し記録の形でとった。

事例と考察

〈1〉保育者は自分の持つ常識の枠を越えた目をもつこと

子どもが遊んだりしたりすることの中には、大人が秩序ある生活を営む上で困ること、又理解に苦しむことが山ほどある。その

時、その秩序を乱されるのがいやさに（これは危険を伴うことが多いので尚更）その枠を全く弛めることなく子どもに押しつけようとする「イケマセン!」「ダメデスヨ!」の連続となり、子どもの遊びに共感する態度など、どこかへふっ飛んでしまう。ここでは、この禁止の言葉をグッと呑み込んで、子どものする遊びを見守った時の記録から考えてみようと思う。

（例1）コタツの上へのぼること（A 一歳一か月）

・母（私）は夕食の支度をしている。それまで家中をトットと歩き回っていたAは、おもむろにコタツに片足をかけ、何とか台の上に登ろうと必死になる。「のんのー、のんのー!!」と叫びながらもがく。ほとんど泣きそうになりながらも、やっと片足がその上へあがり、満身の力を込めた結果、やっともう一方の足も上がる。すると、今度はヨイショとばかりに立ちあがり、母の方を見て「フフフ」と得意気に笑う。狭いコタツの上を歩き回りながら、その間中大ニコニコ顔である。母は落ちたら危険だなあとはいつつ、その時はすぐ飛んで行けば良いと開き直って見守る。Aはコタツの上で歩き回ることが一段落すると、母が野菜を切り刻んだり水を流したりする様子をみている。近頃のAは、大分アংশが上手になってきたので興味が高

い所へ移りつつある。そこは、いつもと視野が違うので楽しいのだろうかと思いつつ母は居る。

この記録にもあるようにAは歩きはじめて一か月。あらゆる所を歩き回り、それが自由自在になると、今度は高い所に興味を示しはじめた。母に抱かれて、Aにとっては上方にあるガス台のおなべの中や洗濯機の中、食器棚の食器、タンスの上の時計などを見ることを楽しみにしていた。当時のAは両親など大人の助けを借りなければ高い所を満喫することは不可能であったのだが、この日からは自分自身で高い所に登り、視野を拡げるといふ新しい体験を積むことになる。これはAにとって画期的なことである。もう母に助けられなくとも、コタツの上に乗りさえすれば、おなべの中も少しは見えるし、母がトントンと刻んでいる野菜や、水の流れる様子をつぶさに、かつ自力で見られるのである。とは言うものの、Aにコタツに登られるということは、母親から見れば危険このうえないことなのでついつい降ろしたり、抱きあげたりしてしまし、時には「乗っちゃダメ!」と言いがちである。大人がそうしてしまうのは簡単であるが、そうしてしまうと子どもの楽しんでいる様子をこちらも感じて同じく楽しむという可能性は、はばまれてしまう。このような場合は、子どものケガには最

大限の注意を払いながら、人としての体験を積みつつある幼ない子どもらに対して、単に大人の秩序を押しつけることなく、その楽しみを充分に味わわせることが必要だと考える。

〈2〉子どもの感じていることを感じとろうとすること

保育者が既に大人であるということ自体が子どもの世界の接近をはばむことがある。つまり、大人は自らの子ども時代のことを無意識の底に沈めていることが多く、大人にとっては余りにも当り前でありすぎて、ついついそのことが子どもにとっては新鮮なものであるということを忘れがちである。結局それが子どもといえどもつまらなく思えてしまう一因となる。けれどもそれらふとしたことをきっかけに子どもの感じていることを感ずることが出来る。次に例を挙げよう。

(例2) なぐり描きについて (A 一歳〇か月)

●母が書きものをしていると、お昼寝から目覚めたAは、「バァッ」と言つて襖の所から顔を出し、母が書きものをしているのを目聡く見つけると、トットトと、母の坐っている食卓へ向つて歩いてきて、背伸びして母の膝の上に坐りたがる。坐ると、サッサと母の手からボールペンを挽き取り、「じーじ、じ

ーじ」と言つてなぐり描きをはじめ。母は、ああまたかと嘆息を漏らす。しかしAは、そんな母の様子には頓着なく喜々として描き続ける。その余りにも楽しげなAの様子に母も釣り込まれ、次第にお互いに描くのを楽しむ。

母が仕事をしていようと何をしていようと、幼ない子はこのように好奇心に満ち満ちてその場にやってくる。しかし、母親の側に「あーあ、またなぐり描き」という嘆息が漏れた時、もうそこには画然と母と子の間に心理的な壁が出来てしまったと言える。母は自分の仕事のペースが崩れることを嘆くのみで、子どもが楽しいと感じていることを最初のうちは感じ取れないのである。

ところで「なぐり描き」と大人は十把ひとからげで言うが、果たして喜々として描き続けている子どもにとって、こういう把え方は適切なのだろうか。母親の心に「なぐり描き」と言う概念が住みつく、そういう目でしか子どもの動きを見なくなってしまうということに気付いた。それに気付かされたのは、Aの余りにも喜々とした様子である。大人から見ればただのメチャクチャ描きも、Aにとっては気持ちのいい(何せ手を自由に動かせるのである)ことであるし、かつ動かしたあとには「軌跡」が残るので

ある。幼ない子にとって「軌跡」が残るということの発見は、過去の発見へもつながるすばらしいことなのではないだろうか。Aの様子を見ても、彼女がふとその軌跡に気付いた時、今度はそつとボールペンを動かし、そのあとをじーっと見て、母の方を振り返ってニコツとしたのである。そう思った時はじめてAのしていることを心から楽しく感じて見守れるようになった。子どもらは、大人が「なぐり描き」と一口に言ってしまうには余りにも「深い多様な体験」を積んでいると言える。

〈3〉遊びの意味を捉えようとする事

大人が子どもの遊びを面白そうに遊んでいると感ずるだけでも子どもはより自由に伸々と自己を発揮しながら遊ぶものであるが、その時、或いはその遊びのあとで保育者が、その遊びの意味を捉えようとする事で、次に子どもに出会う時に、その関係が豊かになる土台となると言える。

(例3) 人にもものを渡す (A 一歳〇か月)

●母が夕食の支度に忙しいと、それまで一人歩き回っていたAは肩籠から、ガサゴソ音のする紙(Aのお気に入り)を取ってきて「はいっ、どーぞ」と母に手渡す。母が「ありがとう。じ

ゃAちゃんこれどうぞ」と言って野菜の切れはしを渡すと、嬉しそうに母の足元に坐り込んで、しばらくそれで遊ぶ。

よく経験することだが、母が忙しく立ち働いている時に、突然Aがやってきて、このようにものの受け渡しを楽しむことがある。はじめのうちは、何故こうするのかよく分らなかったが、色々と考えうちに「人にもものを渡す」という大人にもみられることの原初型ではないかと思えてきた。相手をして欲しかったり、その人と近づきたい時、大人でも人にもものを持ってゆく。持っていくものの種類は違っても大人とAとの間には、共通したこのような心の動きがあるといえる。この小さなAの遊びにはこういう意味が含まれていたのである。こう考えてくると、子どもが何かものを持って来た時には、それを充分受けとめることがお互いの関係を深くするのに重要だと思われる。

(例4) 絵本の上にドンドンと足をのせる (A 一歳五か月)

●Aのお気に入りの絵本に『赤いフーセンとぞうさん』と言うのがある。この日も、Aはそれをひっぱり出して「ぞうちゃん」「ふーちゃん」「リボー(りぼん)」などと言いながらみている。ところがそこに出てくるぞうさんが踏み台をのぼってシ

「ソーの上に飛び降りるページにくると、何を思ったか急に立ちあがり、自分の足をその踏み台の上にのせてドンドンドンと足を踏みならし「ハハハ」と笑う。母は一瞬自分の目の前でこったことが信じられず啞然としてその様子をみている。まあ待てしばしとはかりAのするにまかせていると、今度はフワフワと飛んでいるフーセンの出ているページを開いて、そこからまるで本物のフーセンを手でつかむような格好をしてつかむとクルッと母の方をむき「ハイッ」と言つて渡してくれる。母が「フワッフワッフワッ」と言つてフーセンがゆれているかのようには手を動かすと、それをみて、とっても満足そうな表情をする。

ともかく、急に本の上に乗ってドシンドシンと足を踏みならした時には驚いてしまった。大切な本の上を踏むなんて、何と言うことをするのかと思ひかけ、Aのしていることを止めさせようかと思った。しかし余りにも真剣なAの様子は、私にそのようなことをする隙を与えなかった。次にAがしたフーセンをつかむような格好をみて、私は、はじめて何かのつもりがあつて本の上に乗ったのだと気付かされたのである。Aは単に本の上に乗ったのではなく、「踏み台」に乗つたのである。絵本の踏み台は、その時

のAにとっては、本物同然の意味をもっている。これくらいの年齢のAにとっては、絵本はただ「見」たり「読」んだりするものではなく、行為を誘発する遊具そのもの（もつと言へば、そこに示されているもの自体）であつたのである。以後気をつけてみると、Aは絵本の中のすべり台を実際本の上に乗つてすべり、ブランコに乗り、御馳走をおいしそうに食べたりする。要するに「絵本」は「本」ではないのだ。この遊びは、ごっこ遊びよりその中に没入している。そういうことがかなりはつきりしてきた時、大人の考える「本」という枠でAのしていることを止めなくてよかつたと思つたのと同時に、ちよつとじっくり遊びをみてその意味を考えると以外におもしろいことにつきあたるといふ感を深くしたのである。

おわりに

子どもが深く豊かに発達していくための土壌として、共感者がそばに必要であることは周知の事実であるが、保育者（親を含む）即共感者たり得ないのが現実である。その現実をすこしでも打破するため、子どもが感じ考えている世界に近づくような把え方を模索してみた。このようなことを考えの基本において、これから子どもものの遊びを把え、見続けたいと考えている。

保育の体験と思索

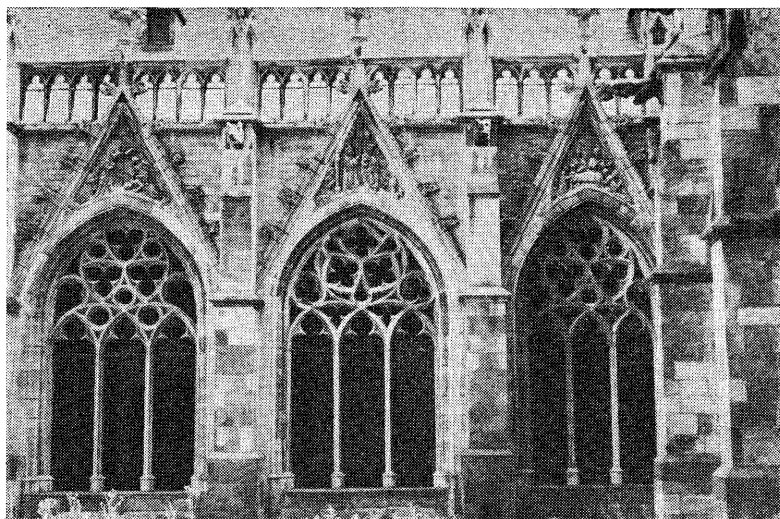
——旅によって触発されたもの——

「保育の体験と思索」を三か月休むことになったがその間に、オランダのユトレヒトを訪問する機会を得た。ユトレヒト大学には、「教育学と人間学の研究所」があり現象学的教育によって知られている。私はいつも旅に出る前はとても億劫なのであるが、思い切って四面海に囲まれた東海の島を離れると、期待していた以上の思いがけない収穫がある。今回のオランダとスウェーデンの旅は二週間という限られた期間であったが、この旅で気が付かされたことの一端を記したいと思う。

津 守 真

*

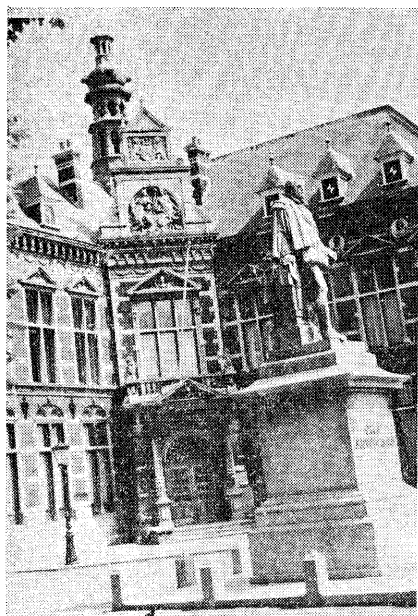
アムステルダムスキッポール空港におり立つと、むし暑かった東京の空気とは違って、六月半ばなのに秋のような爽やかさである。空港からバスでユトレヒトまで、約一時間足らずの間、緑の草原の間に、赤煉瓦の家並みが所々にあり、教会の尖塔がいく



▲ ドムケルクの石の回廊

つも見える。迎えに来て下さったフェルメール先生にたずねると、オランダの教会は、カトリックとプロテスタントと半分ずつだという。ユトレヒトの町の中に入ってはじめて店の並んだ通りに出る。一番賑やかな通りは、ウーデグラハトと呼ばれる古い運河に沿っており、その運河に囲まれた地域の中心に、ドムケルクという古い教会がある。この教会の塔は、ゴチック式の尖塔ではなく、もっと古い形式の円筒形の煉瓦造りの巨大な塔で、オランダで昔から一番高い塔と云われ、ユトレヒトの町のどこからでもこれを眺めることができる。ドムケルクを囲んで、古い運河であるウーデグラハトと、新しい運河であるニューウエグラハトが輪状にあり、進路は中心から放射状に外に向って走っている。運河にかかった昔ながらの橋や、古い煉瓦造りの家並の間の石畳の路など、何百年もかわらない風景なのである。私の泊ったホテルも、近代的な大きなホテルではなく、煉瓦造りの四階建ての小さなホテルであった。玄関を入ってすぐにあるリフト（エレベーター）も、内扉のない簡単なもので、上り下りにはギンギンと音がした。

ユトレヒトに滞在中、私はしばしばこの町の中心であるドムケルクを訪れた。現在も使われている教会の礼拝堂につづいて、宗教改革以前のからの修道院の回廊がある。ホフと呼ばれる中庭をめ



▲ ユトレヒト大学本部

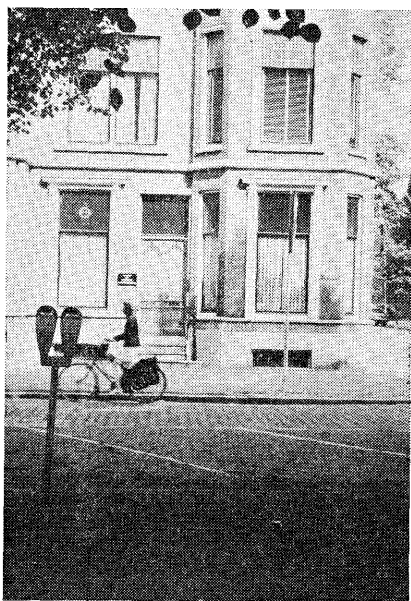
ぐっている石の回廊は、いまはどころ崩れているが、落着いた瞑想の空間を作っている。その中庭の中心を少し外れてなつめのような木が一本立っているのも昔ながらの風景であらう。私はこの中庭が気に入って、何度も行って崩れた石段に腰を下したが、いつも若い人たちがアイスクリームコーンなどを手にしてたむろしていた。この石の回廊に接して礼拝堂の反対側に、教会の付属館（修道院だったのだろうか）があり、これが現在にはユトレヒト大学のアドミニストレーション・ビルディングになっている

る。大学の会議や集会が今でもここで行われるとのことであるが、階段の装飾手摺、扉の彫刻など、内部も外部も何百年も以前に作られた芸術品である。

ユトレヒト大学は、アメリカの大学のように、また日本の諸大学のように、大学全体が一つのキャンパスに集まっているのではなく、市内の数ヵ所に煉瓦作りの民家の間に散在している。このドムケルクから石畳の道をいくつかけ折れ曲ってゆくと、ニューウェグラハットのわきに、「教育学と人間学の研究所」がある。この研究所は、ランゲフェルト、ポイテンダイクというような現象学的教育学を開拓した人々の活躍したところで、いまもなおその後を継ぐ人々が盛んに研究活動をしている。子どもの研究は理論と実践との両方が必要であるという考えから、ここではその両方に取り組んでいるのが特色である。私も一人の五歳の男児のセラピーに観察者として参加させてもらい、大変面白かった。攻撃的な子どもとのことであつたが、この子どもは入室するや否や、窓のカートテンを全部しめるところから遊びが始まつた。後の討論で、他人の目を敵って見られないようにすることによって、遊びにとりかかることができるようになるこの子どものことについて、い



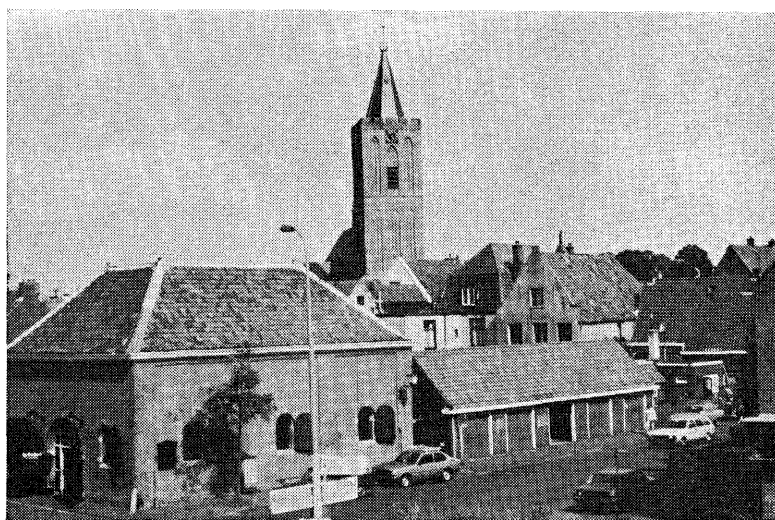
◀ 石畳の歩道



▶ ユトレヒト大学「教育学と人間の
研究所」

ろいろと面白い議論がなされた。子どもがいきいきと遊ぶことができるように、おとなはまず心を開いて子どもにふれることから始まって、その行動の解釈に当たっての考え方など、すぐに共通の地盤に立つことができて私は愉快であった。その後何度かこの研究所のスタッフの人たちと話す機会があったが、現代の主流をなす実証科学的発達心理学とは異った哲学に立つて子どもの仕事をしている一群の研究者たちがここにあることに感銘をうけた。もちろん、この心理学者がすべて現象学に立っているのではない。むしろ、こうした考えで子どもの研究をしている人々は、力弱い一握りの存在と云えるのかもしれない。しかし、しっかりとした位置づけをもって、異った考え方が共存していることに、オランダの精神的風土の特色があるのかもしれない。

ユトレヒト大学の「教育学と人間学の研究所」のスタッフの人たちと、学生の集まる古いレストランの三階で、うなぎのバター焼を御馳走になりながら、一人の人が、オランダ人が最も嫌うのは制服だと云ったのは象徴的である。何事も一色にきめてしまわない寛容の精神は、今もオランダに生きているように思われる。



▲ ナアルデンの町と教会 ここにコメニウスの墓がある

私はオランダを訪問することを考え始めた頃から、エラスムスのことが気になり始めていた。エラスムスは、十五世紀から十六世紀にかけての宗教改革の時代の神学者であるが、カルヴァンの急進的改革にはくみせず、寛容と古典的人文主義によって知られた人である。ドムケルクで廃墟になった修道院の石の回廊を見たとき、また後にナアルデンという古い町を訪れたとき、その中心にある教会は十六世紀の宗教改革のときにカルヴィニストによって破壊され、昔からの壁画はその後に修復されたものであるのを見たとき、宗教改革とは何であったのかを私は身近に問い直したい気持ちに襲われた。ユトレヒトの町の煉瓦造りの古い建物の間の、これもまた煉瓦を敷きつめた舗道を歩きながら、エラスムスはオランダの精神的伝統とどういにかかわりがあるのだろうかとかと幾度か考えた。エラスムスは、当時のカトリック教会の腐敗を批判しながら、急進的な宗教改革の道をとることはできなかった。彼の眼は生きた人生をみつめており、従って一面的にはなく多面的に物事を見る眼をもっており、彼の心は異質なものを包容しうる広さを持っていたのであろうと思う。

日本に帰ってきてから、私はホイジンガがエラスムスについて書いたものを見たが、彼の次の文章は、エラスムスの特色をよく表わしているように思う。「彼の信仰が我々の目にあまりに柔弱

で底の浅いものと映るように、彼の神学もまたあまりに不安定であいまいなように見える。彼はすでにスコラ哲学の厳密な論理は捨て去っていた。彼は定義なるものにあまり価値を認めない。」「彼にとって他の何ものにもまして大切なのはこの地上の和合である。彼はルターがキリスト教徒の一致を一顧だに値しないものと考えているという非難する。神学的論争は彼にはいとわしいものであり、むだなことと思われた。彼は根本的な宗教問題を未解決のままに放置することになっても少しも動ずる風はなかった。聖なる真理は厳密一点ばりの定義には耐えられない。」（ホイジンガ選集4、ルネサンスとリアリズム、河出書房新社、P151）エラスムスはオランダのロッテルダムの生れであり、ホイジンガはオランダのライデン大学の歴史学の教授であり、学長である。一九三六年、第二次世界大戦の前夜エラスムス没後四〇〇年のこの記念講演の中で、ホイジンガは、「かつてないほど世界に満ちている虚偽と愚行、粗野と悪意への反発の感情」が多くの人の胸の中にこめられているこの時代に、「我々は今もなおエラスムスが必要としているのだ」と云っている。

ホイジンガはまた次のようにも云っている。「オランダ人の生活の主旨は依然としてジュネーブの改革者よりもむしろエラスムスによって奏でられていた。知識と文化への愛好を信仰に結びつけ

ることこそあの偉大なるロッテルダム市民の根本精神だったが、そのような結びつきはすでにエラスムスの没年、すなわちカルヴァンが福音を説く以前からこの国に土着化していたのであった。イタリヤ的、フランス的、ドイツ的な性格とは異なる固有な北方形式のヒューマニズムこそ一貫してこの国における文化の培養土であった。」(ホイジンガ 栗原福也訳 レンブラントの世紀 創文社歴史学選書 昭和四十三年、P75) エラスムスはオランダの風土が生んだ典型的オランダ人であったと云ってよいのだろう。

ユトレヒト大学の「教育学と人間学の研究所」の所長をしておられたランゲフェルト先生は、ユトレヒト郊外のベルトーフエンという緑の美しい町に住まれ、後進の学者たちに尊敬されながら、今もさかんに学問活動をしておられる。一晚、フェルメール先生と金沢大学の真行寺さんにつれられてお宅を訪ね、夕食を御馳走になって、ゆっくりとお話を伺うことができたのは幸いであった。折にふれて強調されたことに、教育は終点ではなく、始点に興味を持つのだということばがあった。私はその後、このことばを何度も思い返して、次第にそのことばの重みを感じさせら

れている。「赤ん坊は、最初から人間として生れてくるのではない。だれかが、身を挺して、子どもが人間として成長することの助け手とならなければならない。……」時に話は、ギリシヤ、ローマに、ユダヤキリスト教が伝えられてゆくときの言語の問題、また、オランダの歴史などに広がってゆき、一つ質問すると、つきることなく話がつづいてゆく。実際、おとなになったときの目標を掲げることとはやさしい。しかし、そうやっていく以前の、まだ混沌とした最初の状態を理解し、その価値を認め、助け手となってゆくには、生きた現象をそのままにとらえるところから出発することが必要なのだ。現代の科学的心理学や教育学は、終点から一面的に見ることが多い。時にランゲフェルト氏の現代の人間科学に対する批判は、歯に衣を着せないで鋭い。「ガリレオ、デカルト以来の西欧の機械的科学観は、人間と教育を考えるのには適していない。」そのデカルトは、ここから車で三十分もあればゆけるアムステルダムに長く住んでいたのだ。「日本人は西欧のまねをしないように」ランゲフェルト氏はこう結ばれた。そして最後に、自作の英文の詩「家族」を朗読して下さった。オランダの六月は、夜の十時になってまだまだ明るい。四階建の小さなホテルに戻ってもまだ窓からは市の中心にあるドムケルク(教会)の高い塔を見ることができた。

私がユトレヒトにいつて見出したことのひとつは、生きた人間の現象そのものをありのままにとらえることを出発点とする教育学が、ここにはしっかりと根を張って存在しているということであった。子どもの現象をありのままにとらえるということは、行動を客観的に観察することにとどまらない。むしろ、そこにかかわるおとなの主観的体験の中に真実がある。それだから、子どもにかかわるおとなが、心を開いた状態にあることが必要になる。心を白紙にして、あるいは心の枠をはずして、と云ってもよい。それは決して完全になしうることはないけれども、それができるように心を整える努力をすることはできる。そうして、いくらかでも子どもの現象にじかにふれるときに、それまで見えなかったものが見えてくる。このような観点は、私がこの「体験と思索」のシリーズでとっている観点と共通のものである。このようにして得られた具体的な観察の事実、それを集積し、科学的分析をし、一般的法則をつくるためのデータとして意味を持つものではない。またその法則に照して解釈することによって意味を持つものでもない。それは、その現象自体で十分に意味を含んだものである。

る。そこで子どもに対してどう振舞ったらいかということの答えも、その現象自身の中にある。

私がこの「体験と思索」のシリーズにおいてとっている子どもの行動の見方は、まさにこのようなものであり、その点で、ユトレヒトで私が出会った現象学的教育学の人々と共通のものであった。私は自分自身の迂余曲折したさまざまな試みの後にこうした見方をとるに至ったのであるが、はからずも、全く異った土地で、同じような見方をしている人々を見出したことは驚きであった。一九五〇年代アメリカでは行動主義的発達心理学がまさに隆盛になりつつあったとき——すでにユトレヒトにおいては、現象学的教育学の人々が活躍していたのである。

子どもの見方の基本は一致しており、心を開いて子どもに接するという点では共通していても、子どもにふれるおとなの感性は人によって異なるし、また、それを考えてゆく仕方は、一人ひとり違っている。そしてまた、子どもにかかわるおとなが、めいめい、自分で子どもの行動の意味を発見し、自分自身の見方が開かれて成長してゆくことがたいせつなのであって、思考法も作品も人によって異って当たり前なのである。体験と思索の道は多様である。

ごたごた書き記したが、要するに、私はこのシリーズをこのま

まの調子で書きつづけようと思う。

ユトレヒトのウーデグラハトのわきの大きな書店で買ってきた英語版の書物に、フィリップスの「エラスムスとその時代——エラスムスの諺集の簡約版」がある。(Margaret Mann Phillips: *Erasmus on his times. A shortened version of the Adages of Erasmus. Cambridge Univ. Press. 1967*) エラスムスの著述になるこの諺集は、彼が三十年間にわたって集めた四、二五一のことわざに、彼独自の注釈をつけたものである。彼の考えによれば、諺というのは古代人の知恵の結晶であり、古代世界への窓である。ここでも彼はこれらの膨大な量の諺を体系的に分類することを断念し、「計画的無計画性」をもって、次々に新しい諺を並べて注をつけてゆく。その一五〇八年版の中に、*Festina lente* (make haste slowly) 「ゆっくりと急げ」というのがある。以下、彼の注釈の要約である。保育のことを考えるのにも興味深いので紹介する次第である。

ゆっくりと急げというのは、矛盾したことのようである

が、注意深い慎重さをもって、適時に速やかにせよということである。この諺は、二人のローマ皇帝の最も愛好する諺であつた。一人はオクタヴィウス・アウグストゥス、もう一人はティトゥス・ヴェスパシアヌスである。いずれも優しさや寛容さをもって人々から愛されたが、また、事態が決断を要するときには、速やかに処理することに成功した偉大な皇帝であつた。オクタヴィウスはこの諺を日常の会話にしばしば用いたし、手紙の中にも引用している。この諺はラテン語の他の語で *matura* という一語でもあらわせる。それは何事も急ぎすぎてはならない。しかもおそすぎず、まさに適した時になせという意味である。これは *festinare* と似た語であるが、ある区切られた時間点を予期していかないという点で異っている。

ティトゥス・ヴェスパシアヌスもまたこの諺を愛好した皇帝であるが、彼の鑄造した貨幣には、一面にティトゥス・ヴェスパシアヌスの像が刻んであり、他の面には碇のまわりにいるか、がまきついている図が描かれている。いかり船の動きを緩慢にさせるもので、ゆっくりさせることをあらわす。いるかは最も敏捷な動きをする動物で、スピードをあらわす。だからこのシンボルは、ゆっくりと急げ

というこの諺をそのままに示すものである。いかりは熟考の時を、い、か、は速やかな行為を。このことは更に他の古代人によっても言われている。プラトンは「最初に急ぎすぎる者は決勝点に達するのが遅くなる者である。」と云っている。またキンティリアンは、「早熟な知能は成熟に達することがない」と云っている。また昔の人々の云うことに、「時が至る前に賢い子どもは、老年になると愚かになる」ということがある。

(matura は英語の maturation—成熟—の語源である。)

*

旅に出ると、いつも自分の中であって形をなさないでいたものに新たな輪廓が与えられるような気がする。オランダについて、エラスムスについて、それぞれの専門家からは別の見方があるかもしれないが、いつも保育のことに心を潜めている私にとって、旅によって触発されたことを記した次第である。(つづく)



復刻版『幼児の教育』の頁をくりながら、興味深い幾つかのことに気付かされた。例えば、時折変えられる記事の分類のしかたに、大げさに言うならその時代の意志や文化が反映されている、と言う発見もその一つである。

第三巻までは、「子ども・家庭・学術・史伝・文苑・説林・雑録・彙報」というクラシカルな分類が続き、以後、「子ども・婦人と子ども」という大まかな分類になり、更に「保育者のため」「読書の葉」という欄が附け加えられたりしている。そして、第七巻第四号から、項目を設けて記事を分類することは、廃止された。

初期の誌上を賑わした「文苑」欄の中心は、詩歌であった。時に、翻訳小説や随筆も顔を見せるが、欠かさず頁を埋めているのは、数篇の定型詩と和歌であった。後に、これに俳句が加わるようになる。保育界とは格別の関係を持たない人

にも寄稿を依頼したらしく、創刊号には、代表的な女流歌人中島歌子が、表紙の撫子の絵を詠みこんで、次のような一首を寄せている。

うつくしくまなひの庭に咲にけり

母のをしへのなてしこのはな

また、「幼稚園唱歌」で知られる東くめも、この欄の常連であった。「おかえりのうた」や「鳩ぼっぼ」の作者が、「玉よりたふとし 稚児のころ 花よりうるはし ちこのすがた」などと、言葉の彩に腐心している姿も一興に値いよう。

ところで、これらが物語るのは、保育者の、そして同時に女性の人間的基盤に關して、当時の文化が一つの前提を持っていた、と言うことではないか。すなわち、子どもの前に立つ大人は、当然、豊かな教養に支えられているべきであるということ。そして、詩歌のたしなみは、その象徴だったのである。(本田和子)

幼児の教育 第七十八巻第十一号

十一月号 © 定価二五〇円

昭和五十四年十月二十五日 印刷
昭和五十四年十一月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一の一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所 フレーベル館にお願いいたします

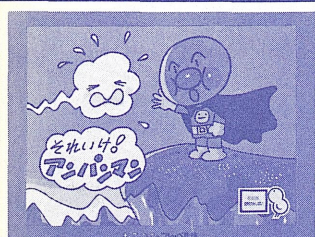
※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。

家族そろって“どうわ”の世界へ……

キンダーブックのフレーベル館がおくる家庭紙芝居の決定版!!

家庭版 幼児かみしばい

B5変型判・本文12場面 各 500円



それいけ! アンパンマン

文/絵・やなせ・たかし



シンデレラ

文・伊藤海彦 絵・手塚プロダクション



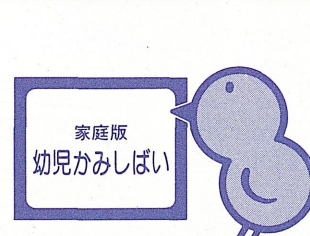
やさしいライオン

文/絵・やなせ・たかし



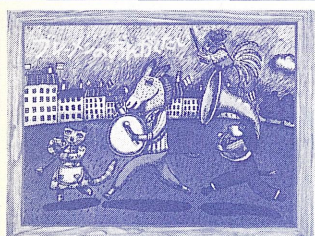
しらゆきひめ

文・稗田幸子 絵・手塚プロダクション



ヘンゼルとグレーテル

文・伊藤海彦 絵・鈴木琢磨



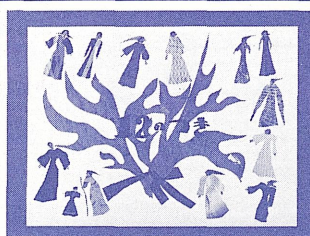
ブレーメンのおんがくたい

文・三越左千夫 絵・おぼ・まこと



ジャックとまめの木

文・舟崎靖子 絵・エム・ナメエ



12のつき

文・稗田幸子 絵・司 修

美しいケースが舞台として使えます。
ジグソーパズルで遊びましょう。

- ケースのおもての絵でジグソーパズルができます。
- ジグソーパズルは遊びのなかで、お子さまの思考力を自然に高めます。

楽しく遊びながら、ことばや数に強くなる！

キンダーかるた

楽しく遊びながらことばに対する興味や関心が高まります。ご家庭で楽しくお遊びください。

集中力を養う玉入れゲームが付いて、楽しさが2倍になりました。

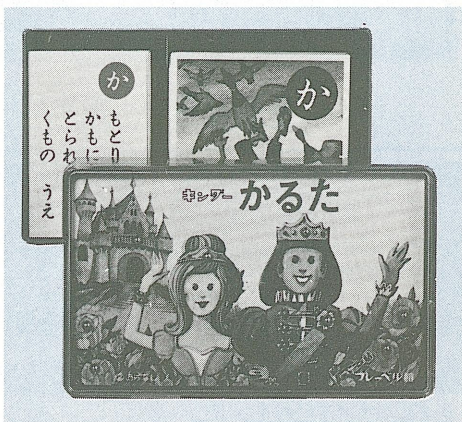


〔なぜなど〕健康的でゆかいな、なぜなどがテーマです。

キンダー **かるた①**

プラスチックケース入り
300円

文・伊藤海彦／絵・原田 治



〔おはなし〕日本民話をはじめ、世界中の童話を集めて構成。

キンダー **かるた②**

プラスチックケース入り
300円

文・榎 皓志／絵・高橋 経

キンダー **かるた③**

プラスチックケース入り 250円

文・まど・みちお 絵・竹山のぼる
現代っ子の生活がテーマです。

〔せいかつ〕



キンダー **かるたA**

プラスチックケース入り 250円

文・川崎 洋 絵・岡本信治郎
楽しい世界の童話がテーマです。

〔世界の童話〕



フレーベル館の
幼児

トランプ

絵・尾崎真吾

動物と果物のマークをくみあわせた、楽しい幼児用トランプです。パバ抜き、神経衰弱、7ならべ等のトランプ遊びのほかに、集合遊び、数遊び等の教材としても使えます。



★87×57ミリ(54枚)

★プラスチックケース入り

250円

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館